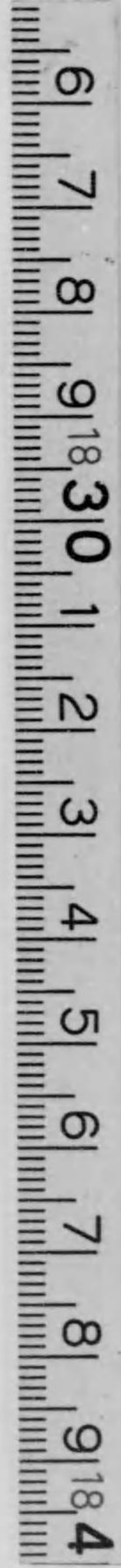


255.1

53



始



32 5.17

7-1314

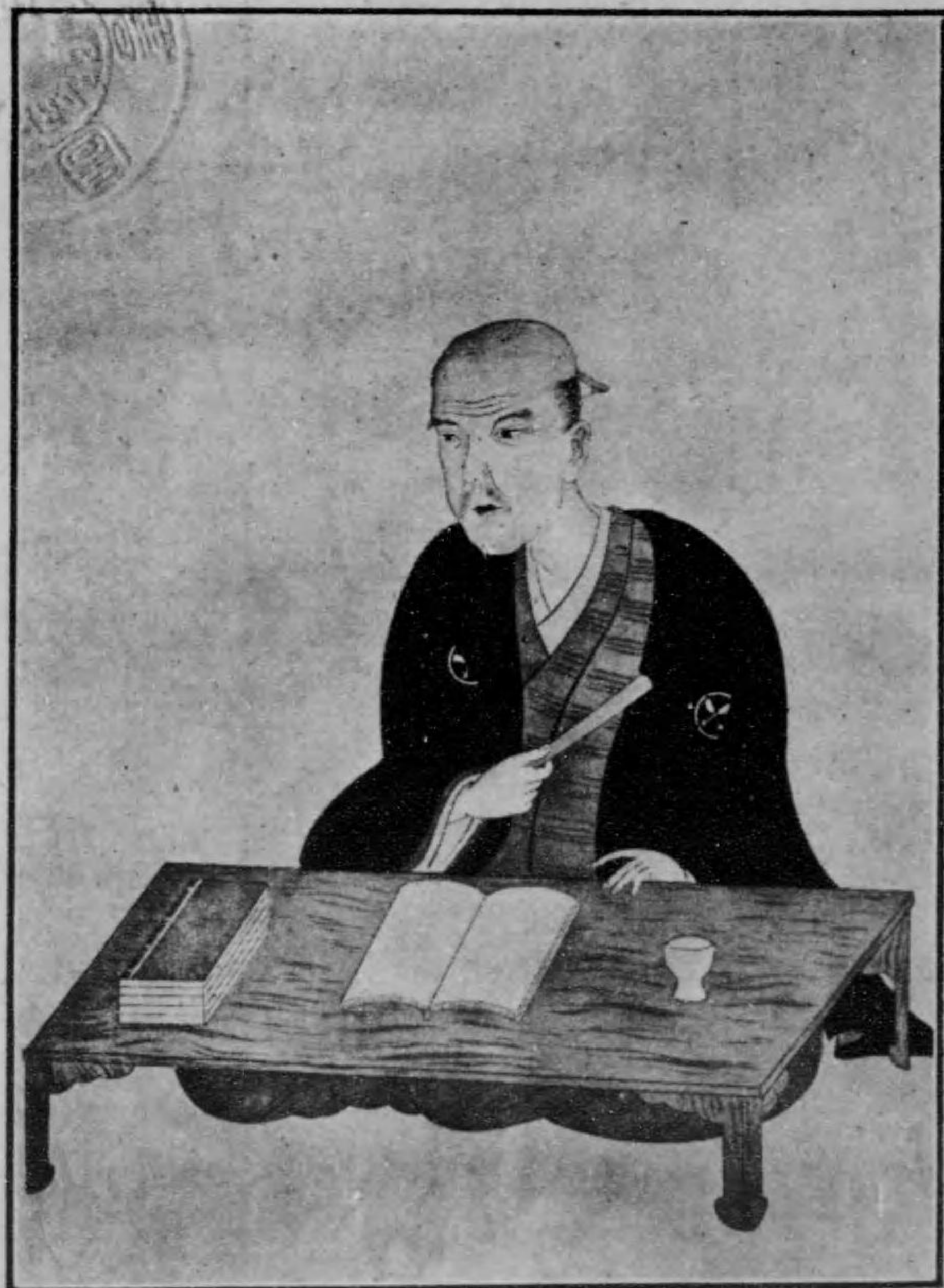
255.1-53

島田民治著

祖徠と其の教育

東京 廣文堂書店發行

大正  
6. 7. 5  
内交

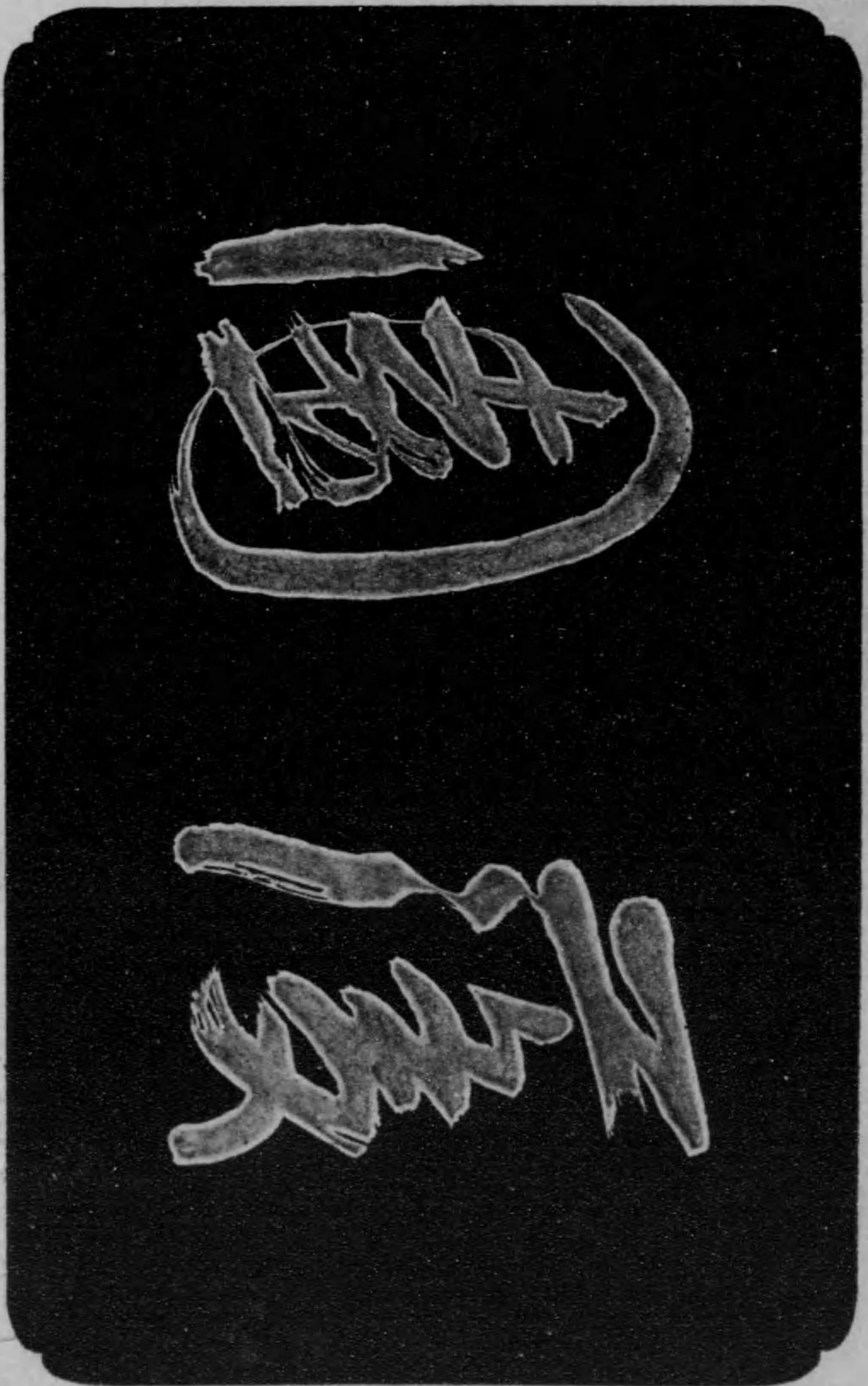


藏 所 氏 傳 生 荻



Art is long, and time is fleeting.

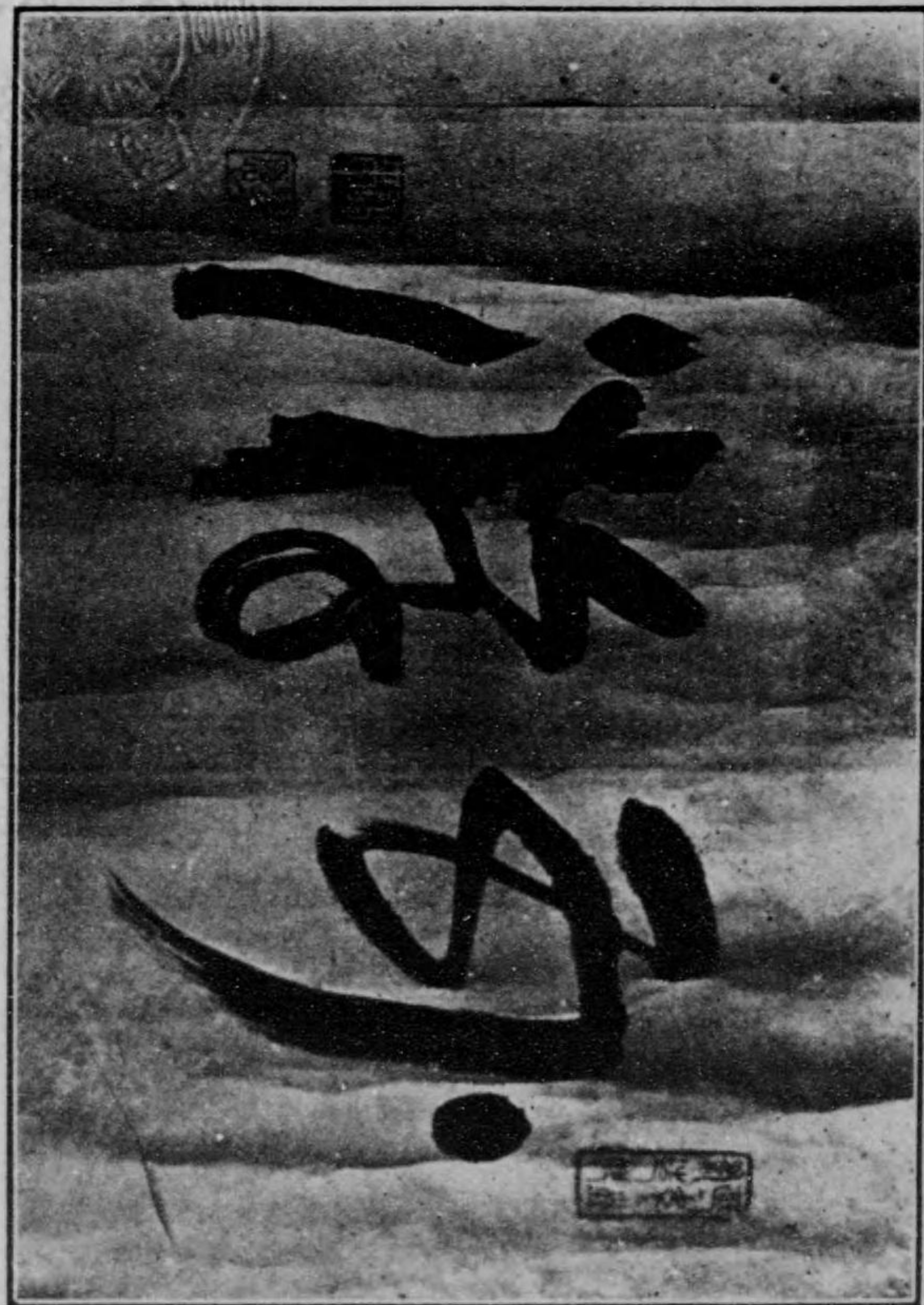
學藝は長く生命は短し。(ロンゲフェロー)



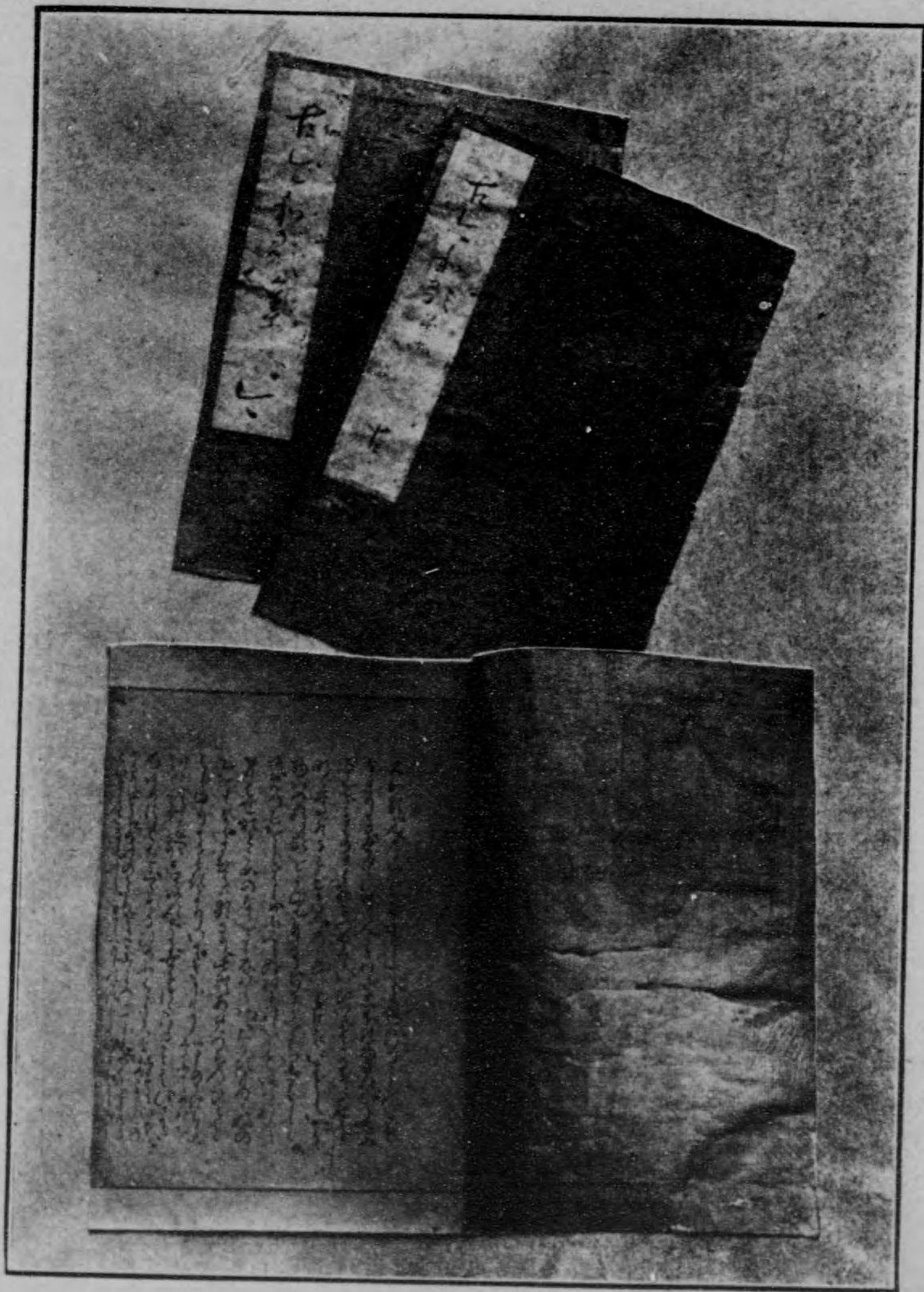
藏所氏馬喜多藤首

(彫字材料) 額 の 掲 所 社 園 藝





藏所氏傳生秋 軸 卷

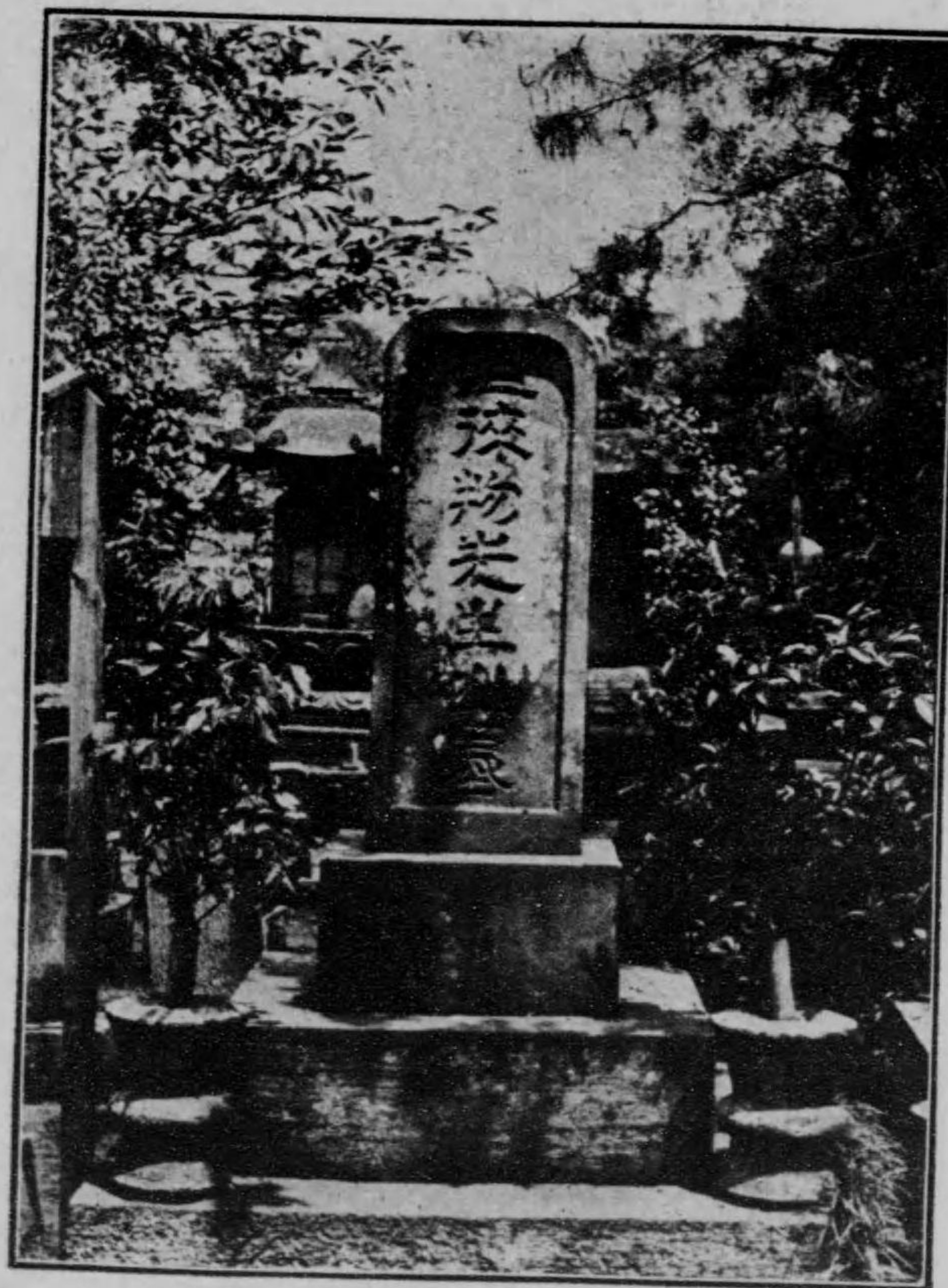


古今和歌集自筆寫本二冊 秋生傳氏所藏



序 言

本研究が初めて其稿を脱したるは明治三十八年にして恰も日露大戦の終結したる時なりき。即ち嘉永開港以來、歐米の文物に眩惑して是れが輸入に熱狂したる邦人が、數度の大戦の結果、心機漸く一轉して日本固有の何物かの存在を感知し、愈、自重の念慮を鞏固にして、茲に國家的觀念の興隆を促し、自國本來の文物を發揮して、世界の舞臺に一異彩を放たんと覺悟するに至れる時なりき。而して、余が日本教育歴史に筆を染めんと試みたるはこの大思潮に動かされたるものにして、又この思潮を助成せんと欲したるが爲なり。



東京芝區田豐岡町長松寺内



爾來年を閲すること十有餘年、殊に最近世界未曾有の大戦亂あり、此の間國民精神の勃興著しく、國粹の保存となり、國産の奨勵となり、國民性の鼓吹となり、國民道德の研究となり、又國民教育の普及に腐心する等、國民的運動の隆なること前古に其の比を見ざるの盛況を呈すに至れり。然れどもこの活動に密接の關係を有する日本教育史の研究が依然として尙舊の如く何等の進歩せるものあるを聞かざるは、國運の發展上甚だ遺憾なりと云はざるべからず。是れ余が此の舊稿を公にして、敢て江湖の反省を促さんとする所以の一なり。

## 二

教育史の研究は元より教育家教育學說、教育事業等の各項を網

羅すべきものなりと雖も、就中教育家に關する研究は其の中心事項ならざるべからず。故に教育史の十分なる研究をなさんとせば、順序として初めに個々の教育家に就きて精細に之を研究し、後其の全體を通觀するを便なりとなす。余の採らんとする方針も亦實に茲にありしなり。然るに恩師三宅博士は曩に斯道の大家貝原益軒に就きてその創見を發表せられ、斯界を裨益せること尠なからざりき。而して余の筆を物徂徠に染めたるは同先生の徳憑に基けるものなり。

實に徂徠は稀世の豪傑にして、益軒と相前後して生存し、元祿享保の時代に活動して創說多く、皮相の形式に拘泥せる從來の教育法を打破して意志の活動に重きを置き、最も徹底的なる自學的啓發的新教育の方面を創設し、又極力個性の發揮を説きて歐米最新

の學說を凌ぎ、孔子教主義の精髓を剝出して人格教育の奥義を闡明し、漢文直讀法を唱へて一世を驚倒せしめ、且、教育政策にも亦一隻眼を有したる炯眼の教育的儒者にして又爲政治家なり。即ち沈滯せる外面的感覺的の社會に向ひて一大斧鉞を加へたる教育改良家にして、日本教育史上特筆大書すべき人物なり。

之を以て、徂徠は復活せしめざるべからず、殊に戦後世界的大發展を要すべき我國民教育に於て特に然りとす。然るに現時我國教育界の趨勢を視、又其の唱道の聲を聞くに、年と共に愈々益々徂徠の主張に接近し來り、恰も大早の雲霓を望むが如く、擧つて其の出現を要望せるの感なくんばならず。此の時に際し、余の舊稿をして徒らに筐底に埋没せしめ置くは唯に斯道に忠實ならざるのみならず、先哲をして空しく地下に泣かしむる所以なりといは

ざるべからず。是れ余が此の研究を公にする所以の二なり。

## 三

余は妄に徂徠を崇拜するものにあらず、又強ひてこれに反對せんとするものにあらず。偉大なる人物には偉大なる長所と著しき短所とあるべし。即ち崇拜者は其の短所をも美化して謳歌の材料となすべく、これに反して其の反對者は長所をも詆毀して完膚なからしめんとするなるべし。人類の父にして教育者の母なりと嘆美せらるゝペスタロッチは百の短所を有して僅に一つの長所あるのみなり、思はざるべからず。徂徠は絶世の豪傑にして卓拔なる見識を有し、空海日蓮等と等しく我敵に對して鋭き論戦を試みたるものなり、之を以て世人の徂徠を見る區々にして嘆美

と詆毀と其聲相交れり、余は是等兩方面の境界より離脱し、只熱心なる研究者として長を長とし、短を短とし、公平且有の儘に之を論評せんと欲する者なり。故に従來徂徠に向つて毀譽褒貶を試みたるものは悉く之を擧げて讀者が判斷の材料となしたり。

## 四

本研究の對象は専ら徂徠の教育法にありと雖も、彼の説を聞かんとするものは、必ずや彼が如何なる人物にして如何なる時勢と如何なる社會に生存したりしかを知らんことを要望すべし。故を以て是等は序論として簡約に叙述したり。

徂徠を寫し、徂徠の教育法を描き出すに就きては、元より著者の意見を以て自由に之を構想したりと雖も、努めて臆度妄斷に陥ら

ざらんことを注意し、一々其の所説を引用したり。されども、多くは難解の漢文なるを以て、讀み易からしめんが爲め、序論に於ては大概之を普通文體に譯出し置けり。

## 五

本研究は余が舊稿に基き、其の後の研究と、最近の教育學術の進歩とに照して之を改訂したるものなり。然れども元とこれ一介の書生の習作にして、研究と稱すべき程のものにあらざるのみならず、余の多忙と淺學とは、未開にして複雑なる我が教育史上の思潮に對して會心の研究を成し遂ぐることを難し、故に這般の修訂に際し、泥上更に泥を塗るの嘆なくんばあらず。唯江湖が是れに依つて幾分の利益を受け、以て現時の教育界を刷新し、又日本教育史

研究の端を開き、更に徂徠の眞價を認むるの一助とならば幸なり。本研究に際し、文學博士三宅米吉先生、東京高等師範學校教授故澁谷啓造先生、文學博士服部宇之吉先生、文學博士遠藤隆吉先生の御指導を受けしこと多し、特に記して謝意を表す。

且本書刊行に際し、七世の孫荻生傳氏と相知るを得、且貴重材料と甚大の御指導とを受くるを得たるは余が無上の愉快とする所にして、本書の價値爲に數段の重を加へたるを信ず。茲に謹で謝意を表し、併せて紹介の勞をとれる知友佐藤利吉君に感謝す。

別府灣頭大分の寓居にて

大正六年六月

著者 識す

### 徂徠と其の教育目次

#### 序 論

第一節 時代と其の主張	一
第一 文藝復興	二
第二 徂徠の主張	九
第三 當時の社會狀態	一七
第二節 略 傳	二〇
第三節 人 物	三一
第一 性 格	三一
第二 愛 才	三三
第三 讀 書	三五
第四 強 記	三六

第一節 道德教育を主とす……………八一

第二節 人文主義的傾向……………八五

第三節 ●國家社會的傾向……………九二

第四節 個性の發揮……………一〇一

第五節 自然感化主義……………一〇九

第六節 自學啓發主義の鼓吹……………一一一

第二章 道德教育……………一一八

第一節 儒教に依る……………一二八

第二節 道德教育の目的……………一二〇

第三節 節慾主義及び功利主義的傾向……………一二五

第四節 人の長所を扶け善を勸めよ……………一二八

第五節 禮樂と習慣……………一三〇

第五 嗜好……………三六

第六 健康……………三七

第七 支那辯問題……………三八

第四節 家庭及び家塾……………三九

第一 家庭……………三九

第二 家塾……………四二

第五節 學問及び著書……………五〇

第一 著書……………五〇

第二 學派及び學說……………五七

第三 學藝の方面……………六八

第四 教育に関する著書……………七六

本論……………八一

第一章 總論……………八一

第六節 遊戯と訓練……………一三八

第七節 己の欲する所を人に施せ……………一四〇

第八節 孝悌より出發すべし……………一四一

第三章 知識教育……………一四三

第一節 形式的陶冶の尊重……………一四三

第二節 學科の選定と人文主義的立場……………一四六

第三節 多方面の知識尊重……………一四八

第四章 身體教育……………一五〇

第五章 教授法……………一五一

第一節 徹底せる自學啓發主義……………一五一

第二節 直觀主義に著眼す……………一五四

第三節 讀書教授法……………一五六

第一 直讀法……………一五七

第二 訓譯法……………一五八

第三 排講義主義……………一六三

第四 自學的讀書案……………一六八

第五 大體より部分に入るべし……………一七四

第六 雑多の語に通ぜよ……………一七四

第四節 作文教授法……………一七五

第一 和文漢譯……………一七五

第二 文章の形式……………一七五

第三 先づ思想あれ……………一七七

第四 古人の佳語美辭に熟せ……………一七八

第五 漢文は日本風なるべからず……………一七九

第六 添削法……………一七九

第六章 學科……………一八一

第一節 學科目 ..... 一八一

第二節 讀書科 ..... 一八二

第三節 歷史科 ..... 一八七

第四節 音樂科 ..... 一九〇

第七章 教育行政及び社會教育 ..... 一九一

第一節 教育行政 ..... 一九一

第二節 社會教育 ..... 二〇〇

結論 ..... 二一一

第一 概 括 ..... 二一一

第二 評 論 ..... 二一三

附 錄 ..... 二二五

一 荻生家系譜 ..... 二二六

目次終

二 遺書遺物 ..... 二二九

三 逸 事 ..... 二三一

四 井上(哲)博士の酷評に對して ..... 二三二

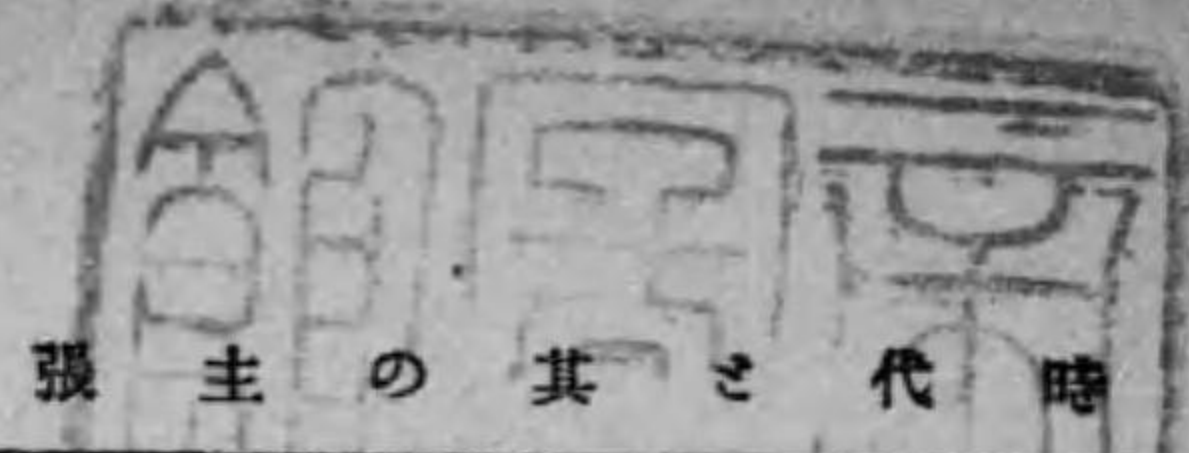
五 子孫に對する世評に就きて ..... 二三六

六 東夷辨 ..... 二三九

其一 木堂先生と三上博士との論争摘要 ..... 二四三

其二 荻生家の辯 ..... 二四四

其三 永原銚齋氏の「夷人物茂卿」摘要 ..... 二四七



# 徂徠と其の教育

島田民治著

## 序論

### 第一節 時代と其の主張

英雄は時勢を作ると雖も時勢が其の英雄を作りしことは決して忘るべからざることなり。祖先や歴史を離れて我あること能はざると共に我は到底時代の産物たらざるを得ざるなり。要は天才と雖も孤獨超然の存在を許さざるにあり。果して然らば徂徠は如何なる時代の産物にして又如何に其の時代に反動を與へた

讀書

本居宣長

ふみ讀めば昔の人はなかりけり

みないまもある我が友にして

(鈴屋集)



るか。是れ第一に起る疑問なり。  
故に今徠徂の教育を叙するに當り、先づ其の背景として當時の時  
代を描き、更に進んで時勢との交渉に及びて如上の疑問に答へ、豫  
め徠徂其の人に就きての概念を作り置き、以て正當の理解を得る  
の資料を提供せんとする。

第一 文藝復興

頼朝天下の權を握りて覇府を鎌倉に開きしより、世は武を惟れ事  
となし文運次第に衰へ行きしに、足利氏の末葉より戰國に及びて  
は遂に其の極點に達し、干戈切りに動きて文化は深く暗中に葬り  
去られたること、恰も歐洲中世紀に於ける蠻人の跋扈時代と彷彿  
たり。而して其の一縷文學の光明が將に消えなんとして僅に僧  
侶の手によりて支へられたること、東西其の軌を一にせる所に

して、其の他経過の形式に於ても能く類似せるものあるは、時勢の  
推移が必ず取るべき過程なればなるべし。闇黒の夜は懸て光明  
の白日となるが如く、初めに破壊的作用を事としたる世は、後に轉  
じて建設的態度を取り、一つは歐洲近代の文明を準備し、一つは德  
川時代文藝復興の基をなせり。

藤原氏が人才登庸の道を塞ぎてより、有爲の士は腕を振ふに地な  
く、去りて地方に行きて武士となり、遂に戰國時代を醸し、盛に鬱屈  
の力を伸べたりしかば、自由活躍の精神頓に勃興し、冒險遠征の氣  
風潏然として海内に充溢するに至れり。即ち八幡船となり、御朱  
印船となり、或は大陸の占領となり、或は南下政策となり、或は大内  
氏の海外文學の吸收となりたる等、國民精神の膨脹發展せること  
驚くべきものにして、恰も文藝復興の曙光に浴したる歐洲人が冒

險遠征の氣象を發揮し、新領土の發見に努めたると同一精神作用にして、又殆んど同時代なり。  
 然るにこの大發展力は元和の偃武に會し、更に寛永の鎖國令に逢ひ、無理無體に一小島國內に封入せらるゝに至りしのみか、徳川時代に於ける社會の秩序恢復は益々個人の活動に關する束縛を嚴にせるを以て、其の反撥力は曾つて徳川家康が促したる文教主義の路を辿りて、進り出で、最も自由に競争を許し、最も眞實に實力を重んずる學術社會に集り、茲に文藝復興の機運を起すに至れり。  
 而してこれが種子を蒔きたるは征韓雄圖の結果より來れる數多の書籍、活版等の齎來にして、この機運を扶助したるは地方の諸侯及び歴代の將軍なり。彼等は武斷專政が到底永く民心を繋ぐに足らざるを自覺し、孜々として學問を奨勵し、學者を保護し、専ら力を

を教育に致せしかば、學者一時に輩出し、文教切りに起るに至れり。徂徠は實にこの文藝復興の機運旺盛なる元祿享保の間に生れ、學問興隆の頂上にありて、文藝教育及び政治の革新に向つて獅子吼したる偉人なり。  
 家康が文教統治主義の第一着手として、從來文學の命脈を維持して、教育を一手に引き受け、然かも歐洲中世紀に於けるそれ等の如くに腐敗せる僧侶の手より其の權を奪ひて、儒者に托したるは、文藝復興の第一關を開きたるものにして、是れより教育は専ら儒者の職となり、教育家と教育機關との發達を見るに至りたり。而して歐洲に於ける文藝復興が伊太利に興りし如く、我が國に於ても古來文化の中心たりし京都を中心として、先づこの機運は動き始めたり。即ち藤原惺窩、林羅山等は率先して、朱子學を唱道し、切り

に窮理格物の説を唱へ、自ら道學の正統を得たるものとなし、早くより宋儒狹隘の風に染み筆舌を鼓して異端を攻撃せり。門下に那波道圓、松永尺五、木下順庵あり、頗る盛にして遂に徳川氏全時代の思想界を壟斷するに至れり。されども自由討究の大精神は決して從來の規矩に踴躍し、徒らに古人の糟粕を舐むることを許さず、多方多面に自由に其の主張を立つるに至れり。即ち中江藤樹は近江に陽明學を唱へて知行合一を説き、其の門下に熊澤蕃山あり、大才を以て之を輔く。谷時中は南學(朱子學派の一派、土佐に起りし故海南學とも稱す)の一派を立て、門下に小倉三省、野中兼山、山崎闇齋あり。闇齋は遂に神道を唱道したり。山鹿素行は何ぞ常師あらんや、天地は是れ師なり、事物はこれ師なりと絶叫して、古學復興の曙光を放ち、且武士道的日本的思想の鼓吹を圖りたり。後伊藤仁齋及び物徂徠ありて古學

派を大成せり。細井平洲は聖學の要は徳を成すにあり、學流にあらずとなし、以上の諸流を折衷して一派を立てんとし、後片山兼山、井上金峨ありて折衷學派を大成せり。而して別に三浦梅園、二宮尊徳の如き獨立學派あり。又有木雲山、阿部漏齋、廣瀬淡窓等の老莊學派あり。儒家の輩出、夏雲の如く、しかも各旗幟を立て、一方に割據し、思想界に覇を争へる様は戰國時代のそれと異なることなし、而して戰國時代の立物は信立と謙信となりしが如く、文藝復興の巨人は實に伊藤仁齋と物徂徠とならざるべからず。彼仁齋は京都に起りて古學を唱へ、天地は一氣なり、學庸は信するに足らず、獨り論孟のみ孔孟の道を教ふるものなりと説き、並河天民これに和し、仁齋の子東涯之を受けて學父よりも深く専ら父説の紹述に努め、護園學派に對して隱然一敵國の勢を成せり。

上來、縷陳せる所は、皆これ京都を中心として起れるものにして、然かも仁齋等の古學派を除きては、宋儒の思想を承けたるものにあらざれば、未だ之を脱すること能はざるものなり。而して朱子派にせよ、陽明派にせよ、山崎闇齋等の南學派にせよ、其の見る所は異なるも、要は所謂心性の研究をなすにあり、之を以て多くは理論に走り、抽象的形而上的研究を能事とせるものなり。之を以て徂徠は敢然として起ち、是等の合理的唯心的傾向は畢竟歴史的研究の不足より來れる儒教の誤解なりとなし、恰も西洋の文藝復興家が希臘羅馬の古思想研究の必要を絶叫したるが如く、大に古學の復興を唱へたり。然れども其の説く所仁齋父子とは頗る其の立場を異にせり。即ち徂徠は家康以來、歴代將軍の計畫を實現して、學問の中心を江戸に移すに貢獻したるのみならず、古文辭學の批評的

研究を以て獨創の見解を立て、天下の諸大儒を敵として、時代の思潮たりし宋儒の心學的傾向を打破し、儒教の根元たる孔子教の眞髓を捉へ來りて、思想界を改革し、此に所謂文藝の復興を完成したるものなり。

されども徂徠等を以て直に古文學復興の全般をなしたるものなりと速断すること勿れ、彼等は當時學界の主勢力たりし、漢學の方面に於て成功せしものにして、古典の研究は徳川光圀、僧契仲等之をなし、國語學の創設は新井白石等之をなせり。

第二 徂徠の主張

徂徠が古文學の復興を説くや、恰も僧日蓮が諸宗を兼學して遂に法華宗を開唱し、盛に他宗を攻撃して自家の地歩を堅めたると同じかりき。當時學界の弊とすべき所は黨争の甚だしきにあり。

即ち鎖國的封建的の根性は自由を貴べるこの域にも見ることを得たりしなり。さるに徂徠は獨り亭然として立ち克く門戸を開放し、誰人とも交はり、誰人が來り學ぶも拒まざりき。即ち彼は韓退之以來儒者の仇敵たりし僧侶とすらも深く交際し、佛若シ中國ニ在ラバ即チ伯夷叔齊ノ類ノミ、僧モ儒者ナリ、耕サズシテ食ヒ、蠶セズシテ衣、讀書ニ餘念ナキノミ、此レ儒者ニアラズシテ何ゾ。又曰く、學問の道は思を貴ぶ、之を思ふ時に當りては老佛の言と雖も皆吾が助と爲すに足る、何ぞ況んや、宋儒及び諸家の説をや。蓋し飛耳長目博く學んで自家の思想を豊富ならしめんことは徂徠の綱領にして、概括的一大思想を建設せんとするはその願へる所なりしなるべければなり。されども自家の所信を發揮せんが爲めには旗鼓堂々あらゆる方面に向ひて攻撃の矢を放ちたり。

就中朱子學派及び仁齋に向ひて強襲を試みたるは自然の勢にして、彼等は其の前面に塞がれる二大強敵たればなり。即ち佛教に對しては出家ハ出世ノ道ニテ、妻子眷屬モナケレバ國家天下モナシ、故ニ佛教ニハ國家天下ヲ治ムル道ナシ。とて孤獨生活を難じ、神道を指しては神道ト云フハト部兼俱ガ作レルコトニシテ上代ニ其ノ沙汰ナキコトナリ。とて歴史上より批難し、上古の思想は反つて大に儒教に似たるものなりとし、武士道をば大形ハ戰國ノ風俗ナリ、馬上ニテ天下ヲ得トモ、馬上ニテ治ムベカラズト古人モ云ヘリ。と罵り、遂に宋儒を排して「宋儒ノ説ケル心性ノ説ハ元ト佛法ヲ引キ合セタルモノニシテ、元來聖人ノ道ニナキコトナル故、佛教ヨリ見レバ其ノ説殊ノ外卑賤ナリ。」と侮り、仁齋を目しては「猶ほ之れ程朱の學のみ」と嘲り、「聰儒仁齋の如きすら猶

は其の習ふ所に卒る。と云ひ、世の儒者輩の爲す所を見ては、世儒に酔うて道理仁義天理人欲口を衝きて以て發す、予之を聞く毎に便ち嘔穢を生ず、乃ち琴を弾じ、笙を吹く、否らざれば、則ち關々たる雉鳩以て其の穢を洗ふ。と。徂徠の見よりすれば、子思孟子以來儒學者流が多年論難討争の結果は、遂に古聖人の正統を誤るに至りしも、群儒は之を知らず、恣に私意曲解して自ら聖人の本領を得たりとなし、國を誤り、人を誤り、果は聖人の教を以て入り難く行ひ難きものとなすに至りしものにして、甚慨嘆すべき至なり、故を以て聖人の教の真髓を獲んとするものは、よろしく其の古に遡り、聖人の手作を取つて、自から之を讀破せざるべからずとせるものにして、遂に自家の主張を提出して曰く、

「道難知亦難言爲其大故也後世儒者各道所見皆一端也夫道先王

之道也、思孟而後降爲儒家者流、乃殆與百家爭衡、可謂自小己、觀夫子思作中庸、與老子抗者也、老子謂聖人之道僞矣、故率性之謂道、以明吾道之非僞、是以其言終歸於誠焉、中庸者、德行之名也、故曰、擇子思借以明道、而斥老子之非中庸、後世遂以中庸之道者、誤矣、古之時、作者之謂聖、而孔子非作者、故以至誠爲聖人之德、而又有三重之說、主意所在、爲孔子解嘲者、可見焉、然誠者、聖人之一德、豈足以盡之哉、至於孟子性善、亦子思之流也、杞柳之喻、告子盡之矣、孟子折之者、過矣、蓋子思本意、亦謂聖人率人性以立道、云爾、非謂人人率性、自然皆合乎道也、它木不可爲、栝椽、則杞柳之性有栝椽、雖然、栝椽杞柳之自然乎、惻隱羞惡、皆明仁義本於性耳、其實惻隱不足以盡仁、而羞惡有未必義者也、立言一偏、毫釐千里、後世心學、胚胎于此、荀子非之者是矣、故思孟者、聖門之禦侮也、荀子者、思孟之忠臣也、然當是時、去孟子

未遠風流尙存名物不爽及乎唐韓愈出文章大變自此而後程朱諸公雖豪傑之士而不識古文辭是以不能讀六經而知之獨喜中庸孟子易讀也遂以其與外人爭者言爲聖人之道本然又以今文視古文而味乎其物物與名離而後義理孤行於是乎先王孔子教法不可復見矣近歲伊氏亦豪傑頗窺其似焉者然其似孟子解論語以今文視古文猶之程朱學耳加之公然岐先王孔子之道而二之黜六經而獨取論語又未免和語視華言我讀其所爲古義者豈古哉吁嗟先王之道降爲儒家者流斯有荀孟則復有朱陸朱陸不已復樹一黨益分益爭益繁益小豈不悲乎不佞藉天寵靈得王李二家書以讀之始識有古文辭於是稍稍取六經而讀之歷年之久稍稍得物與名合矣物與名合而後訓詁始明六經可得而言焉六經其物也禮記論語其義也義必屬諸物而後道定焉乃舍其物獨取其義其不泛濫自肆者幾希

是韓柳程朱以後之失也予五十之年既過焉此焉不自力宛其死矣則天命其謂何故暇日輒有所論著以答天之寵靈  
〔辨道〕  
實に徠祖は歐洲の宗教改革者がなせし如く、歴史的的研究法によりて孔子教の古に復り從來の唯心的抽象的傾向を打破して實際的常識的の見地を立て、性善説を棄て、性惡説に従ひ人欲を認め、實利を重んじ、平天下安民を以て先王の教の精華となしたるものなり。而して其の着想の嶄新なると博學にして雄辯なるとは、思想界に新時期を劃するに適したると同時に、大に天下の耳目を動かし、一時貴紳公子及び藩國の名士より、以て閭巷の處士及び緇徒に至るまで奔趨走調を求め、唯々人後に落ちんことを恐れ、甚だしきは一字の褒貶を得て、以て其の毀譽となすに至る。此の如くにして海内翕然としてこれに向ふに至れり。

徂徠は實に日本思想界の一大改革者なりよしこの評語を許さずとするも少なくとも由來固定せる社會に向ひて多大の研究題目を授けたるものなり。即ち其の死後學海の甚だしく沸騰せるは之を證するに足るものにして彼に向つて攻撃の矢を放ちたるは宇士新が論語考石川麟洲が辨道解蔽蟹養齋が非徂徠學及び辯復古平瑜が非物氏森東郭が非辯道非辯名五井蘭州が非物中井竹山が非徵及び閑距餘筆服蘇門が燃犀錄富永滄浪が古學辯疑石川香山が讀書正誤等重なるものなるが反對者の多きは反つて其の勢力の旺盛なりしことを旁證するものにして若し幕府の禁學令なかりせば護園の學風は永く其の勢を違うして又其の影響も大なりしならんも不幸この後四十年を経て之の禁令あり爲めに充分なる發展を見ること能はざるに至りしと雖も學風を慕ふもの尙

ほ存し文政十年徂徠が百年忌に當り大集會を開きたることあるを以て見ても其の影響の尠少にあらざることを知るに足るべし。

第三 當時の社會狀態

目を轉じて元祿以後の社會狀態を見るに國民の生活餘力は亦美術に發して時代の表面を裝飾せしと雖も戰國時代の質素雄大な風は既に低下して華美驕奢となり武士の元氣は帶刀と共に細り行き氣節次第に墮落して市民のそれと混じ此に伊達者の風を形成するあり一方に於ては富は次第に社會の大勢力となりて市民の勢力勃興し來れるあり加ふるに拜金主義の横暴あり世は鎖國の内に入り太平久しきに互りて刺戟少なく幾多の積極的事業は舉行せられたりと雖も國民の活力を善導するに足らず學問の討究は盛なりと雖も市民の教育は未だ發達せず政權振はず制度



整はず之を以て社會は健全の思潮に乏しく従つて人の慾望は感情的肉慾的にして只生活上の嗜好満足のみを求めんと欲し世を擧げて形式に流れ逸樂に耽るに至れり。八代將軍吉宗能く時弊を察し勤儉尙武を貴び制度を整へ頗る弊風打破に盡力せしと雖も未だ根本的に之を救ふこと能はず世は滔々としてこの流れを追ふのみなりき。かの廻り遠き禮式が發達したるも遊女河原者が跋扈したるも一夫多妻の風が流行したるも猫の虱取を業とする者のありしも死一倍の金を借りしも連歌の花の本より露の一字又立花の家より鳶尾の前置を質に入れしも太甚しきは柿本人丸以來の秀美なりと自慢せる鬘を質に入れし公卿ありしも皆この時代なり。

「せわしなき風俗と云ふは元來政をする人治めの道を知らず法度計りにて國を治むることに成りたる上に上たる人の心我儘より出来ることにて下のおもひやり無き故也。」とて法治主義の弊を説き更に參勤交代といへる旅人的境界より來れる一時間に合せ主義の政治を難じ尙ほ當時は大亂の後なれば武威を以て天下を治め玉ひたるに時代遙に隔りて世の制度は用ひ難く其上大亂後なれば何事も制度皆亡び失せたりし代の風俗を改めず其儘に差し措くによりて今の代には何事も制度なく上下共に心の儘の世界なり。」とて制度を確立すべきを論じたりしは時弊に適中せるものにして又以て當時の社會を察知するを得べし。

徂徠はかゝる亂脈不健全なる社會に生活したるのみか復古の學を唱へて天下の群儒に當りしものなれば其の勢の走する所或は

其の言行の議すべきものあるは頗る恕すべきものありと雖も、特に文學を重んじ、又節慾主義を取りて、從來の禁慾的嚴格なる道德に反對せし結果、其の弊の流るゝ所亦社會の浮薄なる風習を助長したるものありとの批難あるは甚だ惜しむべきことにして、又免がるべからざる所なるべし。

第二節 略傳

徂徂名は雙松、字は茂郷、通稱は總右衛門徂徂と號し、其の社を護國と稱し、幼名は傳次郎と云ひ、徳川四代將軍家綱の寛文六年(皇紀二三年を距る二百五十二年)前江戸二番町に生る。父は方菴と云ひ醫を業とし、將軍家綱が猶ほ藩邸に在りたる時徴されて御側醫師となり、後法眼に叙せられたり。此に於て御本丸船司大將兒島助左衛門の女を

娶りて三子を生む、長を春竹といひ、季を北溪と云ふ、徂徂は實に其の中子なり。而して其の家系を尋ぬるに、祖先は清和源氏にして、賀茂次郎源義綱(八幡太郎義家の弟)に出で、甲賀の役身を以て逃れ物部季定に養はれて子となる、これ物部氏を姓とする所以なるが、徂徂は氏名を支那流に呼ぶことを好みたるを以て單に物と云へり。建武中興には南朝に奉仕し、三河の荻生城に居りたり、これ荻生を氏とする所以なり、されども降りて少目の時に至り、徳川氏の祖先に攻められ、累代の居城を開きて伊勢の北畠氏に投じ、久しく此に居りしが、祖父玄甫醫を以て江戸に來り、道三を師とし、武家の間に立ち交り、以て父に及べり。徂徂が兵を談じ、漢籍に通じ、又醫を知れりと云ふも故あるなり。徂徂が呱呱の聲を上げて以來、其の身邊には如何なる人物が往來

せしか數へ來れば趣味なきにあらず。石川丈山は寛文十二年彼が七歳の時に逝き、山崎闇齋は天和元年即ち彼が十六歳にして上總にある間に逝き、山鹿素行は貞享三年二十歳の時に逝き、熊澤蕃山は徂徠が上總にありし時古河にありしがその赦されて江戸に還りし翌年逝き、木下貞幹は柳澤藩邸にありし日即ち三十三歳の時元祿十一年に逝き、伊藤仁齋は寶永三年四十一歳の時に逝き、貝原益軒は正徳三年四十八歳の時逝きたり。而して略ぼ時代を同じうするものを擧げんに、二十二歳の兄なるは林信篤なり、十歳の兄なるは新井白石なり、八歳の兄なるは室鳩巢なり、六歳の兄なるは佐藤直方なり。四歳の弟なるは伊藤東涯なり、同年なるは水戸の安積澹泊なり。是等は皆徂徠が敵とし、味方とし、互に思想界の雄を争ひたる大家なり。しかも氣魂の大にして學問の博きに至

つては徂徠を推して隨一とせざるべからず。徂徠は實に徳川文學黄金時代の最大なるものにして、北斗が衆星を率ふるに譬ふるも過言にあらざるべし。かゝる偉人は如何にして生長し、如何にして修養し、又如何にして事業を立てたるか。徂徠は幼より岐嶺五歳にして字を識り、九歳にして初めて詩を作したり。父も亦教育に心を止めたりしかば、其の進歩著しく、十一歳の時には他より句讀を受けず、獨力にて漢籍を讀書し得る迄に至りたり。されども家庭の不運は忽ち到來し、父はさる事に坐し幕府の譴に遇ひて、上總國長良郡二宮庄本能村(今長生郡帆丘町本納)に流るに至りたれば、一家はこれに隨ひて彼の地に移住せり。十四歳の少年にとりては確に大なる打撃なりき。即ち自ら曰く、予は幼にして先大夫に従ひ、南總の野に遜る都を距ること二百里にして

近し然れども諸侯の國せざる所君子之を以て居らず乃ち田農樵  
牧海蟹民の處性讀書を好むも書の借るべきなく朋友親戚の驩者  
無きこと十有二年なり。其の時に當つてや必ず心甚悲しむ以て  
不幸となす。とされども讀書に興味を有せる少年は遂に父の  
篋中より大學諺解一本を探し出し愛玩措かず久しく精讀してこ  
れに通じ大に讀書力を養ひしと共に仔細に田園生活の真味を解  
し實物を知り人情を解し社會の實況を見るを得たるのみか廣き  
海原高き山自然の勢力は彼を導き益々大なる人物とならしめた  
りき。その品性その學風その主張は全く之を十二年間の田園生  
活によりて作られたりと云ふも過言にあらざるべし鬱たる大家  
をなし空疎なる腐儒たるを免れたるは實に此に基けるものにし  
て徂徠も亦しかく自覺せる所なり。即ち其の語に曰く然れども

都人士の俗に染まず外州民間の事に嫻ふ此を以て讀書するに讀  
む所皆解す。是れに由りて遂に虚譽を海内に竊む者は南總の  
力なり。と。  
元祿元年二十五歳の時赦されて父と共に江戸に還り芝増上寺門  
前に居り程朱の學を講ず山中の僧侶及び儒生の學ぶもの數百人  
に及びたりされども其の貧困なりしはこの時より甚だしきはな  
かりき。文會雜記に徂徠は芝に舌耕して居られたる時は至極貧  
にて豆腐屋にかり宅して居られたるゆゑ豆腐のかすばかりくら  
はれたりとなり。大に豆腐屋の主人世話やきたるゆゑ徂徠祿得  
られたる後二人扶持やられたるとなり。と。時に柳澤吉保あり  
綱吉の寵臣にして飛ぶ鳥も落つべき權勢を有し武州川越城にあ  
りて儒者を集むるに急なりし折なれば便を得兵學を以て候に仕

ふることを得たり。侯即ち書記を掌らしめ十五人口を授く、是れ元祿九年八月二十二日なり。かくて貧困より救ひ出されしのみか、又青雲の望を達する端緒を開くを得たり。それより同侯によりて亦五代將軍綱吉にも知られたり。綱吉は學を好み、講義道樂とも云はるゝ程なりしかば、蓋世の文豪徠徂を得たることを非常に喜びしなるべく、徠徂も亦將軍の性行に向ひて厚く同情を表はしたり。而して如何に重く任用せられしかはその子孫が寛政年間幕府に奉りたりといへる「先祖書」に因りて知ることを得べし。史籍集覽第十七冊、雜類第二百二十三。是れ實に彼が官邊の履歷書にして、毎月三度宛登城するのみか、將軍が柳澤家に來る毎に必ず出で、書を講じ、或は幕府の御隱密御用に參與し、其の都度拜領物を受くるの榮を得たりしなり。且つこの間藩にありても累りに

増俸あり、遂に藩政を聽くに至り、又侯が修史の總裁に任せり。次で吉保が甲斐に封せらるゝや、寶永三年國內巡視として田中省吾と共に甲斐に行き、國情を察し、名勝古蹟を訪ひ、武田氏の後を弔ひて歸れり。當時の模様は一代の名文たる「峽中紀行」(徠徂集中)にあり。綱吉逝きて後は吉保遂に職を辭して隱退せざるを得ざるに至りしかば、徠徂の失意亦知るべし。されども尙も柳澤家に仕へ、正徳四年吉保が卒する前、常憲院御記を編みし功によりて遂に五百石を領するに至れり。この時に及んで、徠徂の運命は政治上に塞がりしと雖も、文學上の天才は却つて發揮せられたり。此に於て市井の間に出で、門戸を掲げて天下に號叫せり。その柳澤邸にありし時より、家臣中に多くの弟子を得、服部之喬、安藤東野、三浦竹溪等

濟々たる多士を擁したりしが、新に山縣周南の加はるあり、是れより門生の加はるもの愈々多く、太宰春臺も來りて門に入り、雨森芳洲も其の子を托するに至れり。是れより先き、朱子學によりて「隨筆」を著はし、仁齋に向ひて辯難を加へたりし時より名聲漸く揚り、文學社會の雄將と目せられしが、今や俄然として斯界の一大重鎮をなせり。此に於て、徂徠は思想界に向ひて一大革命を喚起し、朱子學より豹變して、盛に古文辭學を唱へ出し、辯道、辯名及び論語、徴を著して、宋儒の非を鳴らし、聖人の道を發揮せんと努め、其の鋭鋒當るべからざるものあり、群儒窮して螻螂の斧を振ふものあり、議論沸然たり。當時屹然として彼に對聳せる二大強敵あり、江戸の室鳩巢(木下順庵の弟子にして、朱子學を奉じ、江戸駿河臺に居る)、京都の伊藤東涯是れなり、然れども鳩巢は醇儒にして多く争はず、東涯は猶ほ更に争はず、東涯は

父仁齋の學を皇張し、鬱として關西の重鎮なり、この故に徂徠の眼に映する東涯は、隱然一敵國を成せり、然れども徂徠の才氣は優に東涯を壓するに足る。之を以て海内第一の人物を以て自ら居り、群儒を視ること、螻蟻の如く、古人を評騰して罵倒至らざるなく、護園の盟社は天下の視聽の中心となるに至れり。嗚呼、南總の頑童一躍して思想界の泰斗となる、其の器驚くに耐へたり。徂徠が古學を唱へ出せし時は、既に八代將軍吉宗の時勢にして、徂徠の政敵たる新井白石は斥けられ、且つ四圍の事情は己に有利となりたれば、再び立つて政治的才能を振ふべき時代の到來を得たり。かくて徂徠は用ひられ官命を受けて「六論衍義」に訓點を施し、城中に入りて御隱密御用樞機に參し、又學事に映掌したりしこと、元祿常憲院の時の如くなりしが、其の間久しからず、享保十三年(紀皇

二三八八年西曆一七二八年正月十九日大雪霏々として降れる時水腫を病んで卒す。時に歳六十三なり。即ち芝區三田寺町なる長松寺に葬る。法諡を清淨院根與知專居士といふ別に儒者としての諡號はなかりしと見え門人等は唯徂徠先生とのみ呼べり。太宰春臺墓誌銘を作り、本多忠統墓碣を作る、墓石の表面には「徂徠先生之墓」とあり。是れより長松寺は舊號壽名山を改めて徂徠山を稱することゝなれり。

徂徠は儒者として立ち政治家となり又儒者として終れり。而して其の貢獻せる所は儒學よりも寧ろ文學により大なりといふべし然れども其の學説と其の才能と其の性行とを考ふるに政治家として立ち治民育英の業に當りたらんには更に大なる成功をなすに至りしならんか私見を掲げて世の批評を俟つ。

### 第三節 人物

#### 第一 性格

徂徠は天才者にして驚くべき能力を有せしのみならず、満々たる才氣と甚大の抱負とを蓄へたる人なれば、其の性行も當時の凡儒に似ざるものあり。原善は其著先哲叢談に於て之を評して曰く「英氣高邁卓犖不羈眼一世を空うす。」と富永獨嘯菴は曰く「假武以來豪傑の士四人あり山鹿素行熊澤了介伊藤仁齋物徂徠。」と雨森芳州は曰く「徂徠は實に一代の豪傑にして常儒を以て之を視るべからず。」と高弟太宰春臺は紫芝園漫筆に述べて曰く「余謂ふ徂徠翁固より能く容る然れども能く學者を容れて而して常人を容るること能はず而かも能く其の人を容れて其の言を容るゝこと能

はす。と又曰く、徠徂先生見識卓絶、知道甚だ明かなり、周南は以て鄒魯以後、是の人無しと爲す、過論に非ざるなり、惟其の行其の知る所に及ばず、殆んど所謂行掩はざる者歟。と又曰く、徠徂先生は仁齋先生を謂ひて奇を好むとす、予より之を觀れば、徠徂の奇を好むこと、仁齋よりも甚だし。と是等は皆廬山の一面を得たるものか、蓋し併せ考ふれば、其の人品彷彿として、眼前に浮び來らん。而して自らも其の力を認識せるもの、如く仁齋ノ實徳ト熊澤ノ才ト、予ガ學文トヲ合セテ聖人出來スベシト云ひ、その臨終の日、大雪降りしかば、人に謂ひて曰く、海内第一流の人物、物茂卿將に命を隕へんとす、天爲めに此の世界をして銀ならしむ。と又曰く、神武天皇以來、其れ幾人か有らん。吾が死後、所有の遺文、逸事、必ず當に遠きに傳はるべし、然れども海内眞に我を知るものなし、我を知る

ものは其れ唯聖人乎。と自重の程知るに餘あり。一言以て之を蔽へば、所謂豪傑の士(註に曰く、當時の豪傑の語は現なり、而して何處までも南總にありたる頑童の様式を失はず、露骨にして無作法なり、と雖も亦眞摯にして温情掬すべきもの多し。)

第二 愛才

徠徂は自ら持すること高く、諸侯の前に節を曲げざるのみか、幕府に入りても宛然其の家庭にある時と異ならず、將軍に謁するは儒者にありては、破格の扱なり、さるに其の節高聲に談笑すべからずと忠告するものありしに、からくくと打ち笑ひ、臣年六十、高聲已に習をなす、豈咕囁私語するを得んやとて之れに従はざりしといふ、以て其の一斑を知るべし。されども人柄よく、先輩は先輩として尊重し、敵視せる仁齋東涯にも敬意を表したり。又後進の士を愛



すること甚しく、必ず其の能を賞し、其の長を扶けたり。これ實に  
 徂徠が教育者として、生命の存する所なり。即ち十六歳の少年水  
 足平之進の書牘を見て、文字に顛倒あるも、年行ぬ故なりとて愛弄  
 措かざりしが如き、又服部南郭の墨水を下る文、平野金華の深川を  
 發する文、高蘭亭の三又泛の作は、鏘然として玉振皆得べからざる  
 文なりとて、自ら折簡して之を寫し、壁に張りて誦せしが如き、安藤  
 東野が嘔血を病み、三十七歳にて死するや、自ら下館候に上書して  
 曰く、渠の才學を以てしてこれに假すに年を以てせば、豈不佞の及  
 ぶ所ならん哉、天之を貧窶にし、又之れが年を奪ふ、加ふるに後なき  
 を以てす、何ぞ其れ毒するや、不佞亦何ぞ祝子の嘆を免れんや。と  
 働して哭するものあり。平野金華が屢々遊里に出入するも、之を  
 咎めず、渠は昂々たる千里の駒なり、數々之を調ぶれば、恐らくは風

逸せん。とて之を厚遇したるが如き、又南郭の初稿に序して「平安  
 の子遷、予に従ふて遊ぶ、數歳にして業成る、成れば即ち予が不佞の  
 敢て當る所に非ず。」と奨勵せるが如き、其の温情の自然にして、宏  
 量能く容るゝ所は、他人の學ぶべからざる所にして、門下に其の人  
 多きも、一つは是れが爲めなり。

第三 讀書

門弟評して曰く、「二十五マテ田舎ニ難儀シテ育チタルコト、故聲色  
 ノ好ナド曾テナシ、唯書ヲ讀ム外ノコトハナキ人ナリ。」と實に讀  
 書はその生命なりき。之を以て書を愛すること甚しく、嘗て庫一  
 つの書物を拂ふものありしに、家財を賣却し、六十金を得て之を購  
 ひたる程なり、されば讀書に耽ること甚しく、終日端坐し、黄昏に至  
 れば、檐に出で、夜に至れば、燈下の元に入り、曾て書を離したること

なく、一度書に向へば書の外一物も心に入らざるなり。曾て南郭が新年を祝さんとして其の家に至りしに几によりて孫子を読み、面も洗はず髪を梳らず、切りに兵を談して新年を知らざるもの、如くなりきと。而して讀書の間は思想を亂されんことを恐れ侍婢すらも書齋に入ること許さざりき。又白晝毎に假寝をなし、頭腦の休養を計れるは學者的一奇癖となすべきなり。

第四 強 記

「徠徠書物ヲ引出シテ見テ物ヲ書カ、ル、コトナシ、皆ソラ覺、エナリ。」と強記の程知るべし。曾つて門弟子に示さんが爲めに韓非子の論を一夜の内に作りしが如きこの結果なり。蓋し博聞強記は誰人も徠徠に許すべき評語にてあるなり。

第五 嗜 好

徠徠は思想上に於ては、經學、兵學、政治、經濟、醫學、文學等多方面に興味を有し居りしも、元來無器用にして文學の外藝術的の趣味少なき方なり。人あり其の樂とする所を問ひしに、炒豆を噛みて宇宙の人物を誣毀するにあるのみ。」と答へたることあり。この語よく其の性情を寫し出でたるものといふべし。然れども孔子教的思想上より特に音樂を重んじ、精力を盡して之を練習せり。

第六 健 康

徠徠は其の舉動磊落なるに似ず、極めて意を攝生に用ひ、飲食居家より出入舉止、賓客應接の事に至るまで、苟も生を傷ふものは斷じて爲さざりき。即ち夜深しを好まず、遊船を喜ばざるが如き然り、由來護園社内には春臺南郭を筆頭として酒量の大なるもの多し。徠徠は隨分行儀ヨキ人にして又無粹不風流に、且つ下戸なりしと

雖も興至れば又善く痛飲せり之を以て時に健康を害することありき。而して其の衛生に意を用ふるは體質の虚弱より來りしものか。峽中紀行に予が年四十一省吾は三十九にして顔色老たり然れども予多く病み善く臥し其の噉食する所に於て頗る省吾に及ばず性又懶甚又子房の疾あり行けば則ち鴻雁の歩み遠きを致すこと能はず省吾は則ち幼にして擊劍を學び甚口使氣慷慨にして舉止甚だ急促なり故に予或は粥飯僧の請あり而して省吾は名儒俠の間に在るを免れざるなり素常相見る毎に輒ち必ず善誼紛然競うて相誇り其の健壯を以て其の歳を鬪ふ。こあり。身體的情況は精神力の旺盛なるに及ばざることを知るべし。

第七 支那癖問題

徠徠曾つて孔子の畫像に題して、「日本國夷人物茂卿拜手稽首敬

題」と書せり是に於て村田春海、藤田東湖等先づ之を批難し、後人これに同するもの多し然れ共其の辯議說に曰く夷人とは野人又は凡夫等の義にして謙讓の語たるのみ敢て我國を侮蔑したるものにあらずと。元來徠徠は國家主義者なり後説を是とすべし。以上七項を通じて之を窺ふにその性行はよく其の主張及び綱領と類似せるものなることを推知するを得べし。

第四節 家庭及び家塾

第一 家庭

由來支那思想は女子を度外視し又家庭を輕視せるものなるが徠徠も亦これに漏れず自ら其の家庭につきて云へることも少なく又人の之をいひたるものも少なし。吾人が特に之を云はんとす

るは教育的方面より見て貴むべきものあるを知ればなり。蓋し家庭は父祖の感化と四周の影響と自己の性行及び自覺を窺ふに足るものにして、其の人の人格及び教育上の意見は茲に反映し居ればなり。

徂徠は善良なる家庭に生育せり。その父は子女の教育に注意し善良なる塾生の性行を見習はしめ、又學問の趣味を養はんとせり。南總に移りてより後のことは知るに由なきも、尙ほこの方針を變へざりしなるべし。

徂徠は先に西の丸與力三宅孫兵衛の女を娶りしが不幸にして先だゝれたり。彼女が如何なる人物なりしかは死後良人が宇治黄檗山の僧悦峯和尚に送りたる書によりて知ることを得べし。

「袁了凡先生功過格實爲勸懲設也、拙荆在世譯倭語命工上梓板共

二枚、藏在干家、今謹送上、蓋士人藏板、人自不識、求者甚尠、或付時鋪、則爲射利之具、伏煩和尚帶回本山、打若干本、廣施世上、利益無量矣、拙荆平生雖未克信、因果然其好善、出自天性、故是么麼聊以酬渠志願耳、

と、又尋常の婦人にあらざりしなり。一度家庭の不幸に遭ひたる彼は五十歳前後にして後妻を迎へたり。彼女は水戸の史臣岡伯錫の愛姪佐々氏なり、亦先立ちて逝けり。而して何等の知るべき生存せり。家庭の不幸は三度襲ひ來りて先妻三宅氏との間に生れたる二女共不幸夭折するに至りしかば、兄春竹の長男を上總國本能村より招きて養子となせり。二代の荻生總右衛門道濟は即ちこれなり。其の子孫業を繼ぎて學職を事としたるが櫻水に至りて、令名亦高し。仁齋の子孫が綿々業を繼ぎて名聲あるに比し

て敢て遜色なし、七世の孫傳氏今大阪にありて家運尙盛なり。

第二家塾

徂徠の教育主義はこの家塾に於て發揮せられ、よく人の才能を愛護し、長を取り力を簡性の發揚に勉め、自然主義を取りて敢て干渉せざりしかば塾生は心のまゝに發達し、各特色ある俊傑を輩出するに至れり。即ち詩文に於ては安藤東野、服部南郭、平野金華等を推すべく、經學には太宰春臺、山縣周南二氏を推すべきなり。

春臺は門弟中の筆頭に推すべきものなりと雖も、徂徠の爲めに兩翼となり、古學唱道の當時より贊助の力を盡したるは周南と東野となり。従つて徂徠も之を愛すること衆に越え、眞に父子の親密ありたり。

山縣周南は長門の人なり、名は孝孺、字は次公、通稱は小助、儒家に生

る。十九歳の時徂徠の門に入り、三年にして業成り國に歸る。藩侯明倫館を興すに及び、與りて力あり、後祭酒となり、益々學規を立て、訓勵方あり、一時俊才輩出せり。又崎陽の學(崎陽は長崎のことなり)に通じ、朝鮮の使節を引見して應接甚だ巧なり。寶曆二年六十六歳にて死す。徂徠評して曰く、文儒人となり、質實なり。と蓋し、護園社中の人は徂徠の口吻に倣ひ、古人を拊撃、詆訶して餘力を遺さず、駁々として厚道を失ふものありと雖も、獨周南は溫良馴雅にして、其の持論も稍公平なりき。(春臺の評)而してこの社より出で、育英の道に従事したるは周南一人なりしかば、徂徠が彼を以て吾が教育意見の發表口となせるも、故なきにあらざるなり。安藤東野は下野の人なり、詩文及び書を能くし、兼ねて音律を巧にせり、されども家貧にして加ふるに蒲柳の質なり、時に咯血するこ

とありしが遂に三十七歳にて死せり。徂徠は慟哭して父兄も及ばざるほどの力を盡し、以て後事を處置せり。  
太宰春臺は信州飯田の人なり、名は純、字は徳夫、通稱は彌右衛門、幼にして江戸に來り、長じて出石侯に仕へ、後京都に遊び、流宕十年の久しきに互りぬ。故に東野の招により、京都より出で、徂徠の門に入りしは、後年のことなり、彼は徂徠と性格を異にせる故に、徂徠及び其の門下に對して、同情薄く、寧ろ仁齋を敬慕せし跡ある程なり、故を以て春臺の評語は多くは徂徠及び其の門下の缺點を指摘し、反情的傾向の存せるを觀るべし。人と爲り極めて嚴格に風格清貴にして、大納言以上の人品を備へたりといはる。されば豪爽禮節に拘はらざる徂徠と合はざるに至りしか、彼の著紫芝園漫筆に、蓋先生の志は進取に在り、故に其の人を取らざるに才を以てし、德行

を以てせず、二三の門生亦其の説を習聞して、德行を脩しとせず、唯文筆を是れ稱す。之を以て徂徠の門には、跡弛の士多く、其の才を成すに及んでは、特に文人に過ぎざるのみ。其の教然り、外人既に是を以て先生を譏る、純亦嘗て竊に先生に不満なり、此れ先生の純を雞肋視する所以なり。と云へり、亦以て兩者の關係を知るに足るべし。徂徠の没後は、經術を以て自ら任とし、其の學説を繼述し、鬱として大家をなす、藩侯大夫より草野の士に至るまで、門下に遊ぶもの多く、又聘庸せんとする諸侯も多かりしが、敢て仕へず、六十歳を以て逝けり。春臺は頗る笛を愛し、又酒を好む。常に曰く、「大夫事を處するに望んでは、動もすれば憂患にかゝること多し、斗酒を灌ぎて胸中の壘塊を破るに非ざれば、英氣屈す。」と。  
服部南郭は尾張の人なり。「經義は春臺、詩文は南郭」とは、徂徠も人

も許したる所なりき。人と爲り温雅にして風流に富む。春臺と  
比するに彼は秋の野に霜の敷けるが如く、これは春の山に霞の  
懸けるが如し。之を以て藝苑の士敬慕せざるはなく、束修を薦む  
るもの甚だ多く、年に百五十兩の多きに及び儒家の最高格に位せ  
るものなりしといはる。されども専ら詩文に耽り、閑雅に日を送  
らんと願へり、而して繪畫と和歌とは其の嗜む所なり。周南去り、  
東野死して後は最も徠徠に信任せられ、遺命を受けて後事を處置  
するに至れり。

平野金華は奥州の人にして、護園社中の奇人なり。人と爲り豪飲  
を好むを以て家産爲めに乏しけれども、聊も意とせず、頗る任侠の  
義氣あり、曾て端午の節新衣を作ることを得ず、妻の衣を着て主侯  
に賀を述べしことあり、儒生なりと雖も、架上には唯僅に左傳禮記  
に成るを常とせり。四十五歳にて卒す。

この他、成島錦江大内熊耳宇野士郎高野蘭亭宇佐美瀧水鷹見爽鳩  
三浦竹溪山田麟嶼の如きありて世に聞えたり。

此の書冊を數篇閲し、後一氣に筆を取るに、人を驚かすの明文立處  
に成るを常とせり。四十五歳にて卒す。

天下の群儒を壓倒して、霸氣滿々たる彼が護園の社風は、其の生  
氣の迸る所決して嚴格靜整たるものにはあざりしが如し。蓋  
し水清ければ大魚住ますとの格言は常に徠徠の念頭を支配せし  
ものか。屢々妓樓に遊べる平野金華あり、家庭に於て妓に媒狎せ  
る東野あり、侍婢に通じて出奔せる寫字生文啓あり、徠徠の居室に  
は寒山拾得の繡案なりとして、娼婦の三幅對が壁間に掛けられた  
ることあり。由來徠徠は盛氣を以て門人を教ふるを以て門弟又

満々たる活氣あり、時には議論沸然として起り、學舎の喧騒長く止まざることあり、其の宴に會するや、意氣衝天の士堂に滿ち、氣焰萬丈、詩文を誦し、箏絃簫笛を和し、酒を遣りて必ず娛を盡せり。而して徂徠も平生普通の場合にありては小兒輩には教授をなさざるを常とせり。之を以て雨森芳洲は「徂徠は一代の豪傑にして常儒を以て之を視るべからずと雖も、其の人を教ふるや徳行を以てせず、是を以て家序を失ふ、以て少年を托すべきにあらず」とて吾が兒を取り返したることあり。春臺が「徂徠の門、蹶弛の士多く、其の才を成すや、特に文人に過ぎざるのみ、徂徠先生平生小子輩に教へず、是を以て其の門長幼の序なし」と云ひ、太田錦城は「近時物茂卿の徒より學問皆空詩浮文に流れて經義直道など講ずる人少なし、此の二十年以來は學問益々浮薄にして書畫文墨のみに走り、風流

を以て學問とす、恐るべきの甚だしきなり。」と云ひ、「忠孝仁義を講せずして豪傑の氣象のみを學ぶ。」と慨し、井上哲次郎博士は「日本倫理彙編に於て、思ふに名教上に於ては徂徠は功罪相償はずといふべきなり。徂徠の門人及び徂徠に私淑せるもの其の人に乏しからずと雖も、僅かに春臺一人を除けば道義節操を以て自ら任ずるもの殆んどあるなし。多くは文墨風流の士にして、輕佻浮薄放蕩無頼の徒少しとせず。稀に經義を講ずるものありと雖も、疎放暴慢にして禮節に拘らず、動もすれば法度の外に逸するものあり、是れ皆徂徠の責任を遁るゝこと能はざる所なり。」と痛論せり。是等の中には純正理性の批判に基くにあらず、感情を以て評隲せるものあり、從つて極端なる言議ありといへども、大體に於て護國社中にこの傾向ありしは事實なり。これ徂徠の教育主義の長所



にして亦短所のある所なりといふべし。

### 第五節 學問及び著書

徂徠は驚くべき讀書力を有し、飛耳長目博く古今の書に涉りしのみか、記憶亦旺盛なりしかば、其の識類る博く、殆んど當時の學界に互れるのみならず、又驚くべき消化力と應用の才とは總てを集めて生ける我が知識となし、變に應じ、機に臨んで之を思のまゝに活用することを得たるは、是れ徂徠が潑刺として世に活動せる所以にして、世の儒者と日を同じくして談るべからざる所なり。而して其の思想の産物たる著書は能く之を證明せるものといふべし。

#### 第一 著書

高弟服部南郭が紹介せる所によれば其の種類左の如し。

#### 物夫子著述書目記(南郭先生文集 四編卷六)

「……喬嘗與護社之盟、俟且臨、夫子易簣時、親受著述傳貽之屬、乃與二三子、患其謬亂如此、相與以其平日所與聞、重討論之、定錄其書目、以防姦僞、有已刊者、有刊後自廢者、有秘而不傳者、有略構起端而未定者、有一時戲作者、各分辨記之如左。

辨道	一卷	辨名	二卷
論語徵	十卷	大學解	一卷
中庸解	一卷	文集	三十一卷
度量考	二卷	絕句解	三卷
答問書	三卷	孫子國字解	十三卷
右十部既刊者、			
絕句解拾遺	一卷		

右夫子撰絕句解時、於稿中刪去者、夫子沒後、門人惜其遺落、而拾收刊行焉。

譯文筌蹄 六卷

右夫子初年、授門人而筆受者、雖刊行焉、晚歲頗有毀廢之志、故棄而不用、後編未刊者、亦舉以火之、不藏于家、今世姦猾之徒、私刊後篇、或更題目行之者、往々有之、皆所不用者。

護園隨筆 五卷

右夫子中歲之作、至于晚歲、亦毀廢不用。

文野 一卷

右初年所作、前已焚毀。

吳子國字解 五卷

讀荀子 四卷

讀韓非子 三卷

讀呂氏春秋 四卷

古文矩 一卷

明二直隸十三省考定圖 一帖

右六部中歲作、未成者、或起端而不竟者、必當埃刪定、然後視人者也。

唐後詩十集 七卷

右半已刊、余乃本未成。

四家雋 六卷

右評未全備。

明律國字解 三十七卷

右晚年作、唯為律語多難讀、而作解以藏于家而已、既而夫子曰、法律之改、非先王以德禮之本、今天下依封建之制、則同乎三代之所以直道而行者也、若依此為律易解、人輒用之、則害於其政、當秘而不視、爾乃盟者八人、特得睹耳、余雖同社、不許輒視。

樂制篇 一卷

樂律考 一卷

鈴録 二十卷 附録 三卷  
右三部亦頗秘、不許刊行者、

琉球聘使記 一卷 幽蘭譜抄 一卷

琴學大意抄 一卷 文變 一卷

韻槩 一卷 滿文考 一卷

葬禮略 一卷 詩題花 三卷

南留別志 五卷 廣象碁譜 一卷

右十部一時戲作、亦小而辨物爾、不必當弘行者、

以上凡三十六部百九十一卷、

不見以上目中者、皆非真也、惟後進君子、有取裁焉、

南郭が其師の遺書を思うて注意周到なる、誠に諒とすべきものあるを感ずるなり。されども近代名家著述目錄による時は實に七

十八部の多きに達せり。吾人は後者には如何はしきものありとは思ふ所なれども、南郭が示したるもの、外に確に徂徠の思想より出でしものあることを信ずるものなり。今左に列挙して其缺を補はん。

孟子刪 素書國字解 二卷

明律考 八卷 紀効新書抄

射書類聚解 二卷 西洋火攻神器說國字解 一卷

素問評 一卷 譯筌後編 三卷

孟浪之篇 譯則

草堂客話 經子史要覽 二卷

讀答問書 鈴録外書 三卷

政談 八卷 太平策 三卷

經濟總論 二卷

憲廟實錄 三十卷

枸梁餘材

皇朝正聲 一卷

詩語自在抄 十二卷

徂徠先生外書 三十六卷

護園錄稿 二卷

護園遺編 二十卷

管子考

晏子考

樂語瑣言

輪墨子略

辨髦編

井地解

歌頭集

文考

論語辨書

甲州府志

以上の外點を施せるものあり。左の如し。

晉書點

宋書點

南齊書點

梁書點

陳書點

射學正宗點

射學正宗指迷集點

六論衍義點

第二 學派及び學說

以上によりて之を見るに、徂徠は文學に通じ、經義に精しきのみならず、政治經濟にも、軍學にも、度量衡にも、法律にも、音樂にも互り、歴史古實をも知り、又地理をも辨へ居たりしなり。而して其の特色は復古の學を奉ずるにあり。而かも年五十に至るまでは時勢の赴く所に從ひて朱子の學を奉じ、仁齋が京都にありて古學を唱へ出すや、護園隨筆を書きて痛く之を攻撃したり。されども一旦明儒李于鱗、王元美の文を讀むに及びて、初めて古文辭の尊むべき所以を知り、悉く舊說を棄て、専ら古文學の批評研究を始めた。此に於て復古の所以を説明して云はく、昔人言あり、曰く古に通じ

て今を知る。蓋古は本なり、今は末なり、故に天下能く古を置きて  
 今を爲すものは有らざるなり、故に亦未だ古に通すること能はず  
 して、即ち能く今を知る者は有らざるなり、夫れ今人の古人たるこ  
 と能はざるは、姑く諸に置き、且つ言はん、其の能く今人たる者は邪  
 んぞ天下未だ能く古を置きて今を爲すものあらんや、苟も古に通  
 せずば亦今人たること能はざるなり。故に學問の道は必ず古を  
 貴ぶ。と然れども、稽古は必ず其の古に泥むを欲するに非ず、乃ち  
 其の今を知らんと欲すればなり。と警告し、古に通じて後に今を  
 知り、今を知りて後、以て今を治むべし。故に稽古は書經開卷第一  
 義なり、而して亦天下國家の第一義なり。と論斷し、遂に稽古の態  
 度を採るに至りて自ら感じ得たる所を人に告げて曰く、不佞古文  
 辭を好むは足下の知る所なり、近來間居無事、輒ち六經(詩經書經禮

春秋をいふ、後樂經亡びしより五經といふ、莊子天運篇に曰く、「孔子謂老  
 聃曰、丘治詩書禮樂易春秋老子曰、六經者先王之陳述也、司馬遷は史記に  
 六藝といひ、班固は六籍といひ、固を取つて之を讀むに稍々古言の今言に同じから  
 ざるを知る。迺ち遍く秦漢以前の古言を採つて以て之を求めて  
 後に宋儒の妄を悟る。宋儒皆今言を以て古言を視る、宜なり、其の  
 舊より理窟を没するや。李攀龍、王元美は僅に文章の士なり、不佞  
 は乃ち天の寵靈を以て明らかに六經の道を得たり、豈大なる幸に  
 非ずや、蓋し中華は聖人の邦なり、孔子没して二千年に垂んとして  
 猶且つ有るなし、然るに迺ち東夷の人を以てして聖人の道を遺經  
 に得たる者は亦李王二先生の賜なり。」と其の喜や知るべきなり。  
 而して一度古學に眼を晒らし、六經を味ひたる彼は雲を開きて富  
 嶽に登り、初めて天地の大を知りたる如く感じたりけん、古の道豈  
 遠からんや、譬へば泰山に登つて天下を小とするが如し、群小は亦

培塿のみ豈六經の旨に翹らんや荀孟(荀子孟子)程朱(程子朱子)陸王(陸象山王陽明)及び藤樹(藤樹)仁齋(仁齋)が學となす所は亦皆瞭然として掌を指すが如し。と堂に入り遂に室に至りしなり。かくて聖人の道を求めんと欲するものは必ず諸を六經に求む。六經は即ち先王の道なり。六經は其の物なり、禮記論語は其の義なり、義は必ず物に屬して後に道定まる乃ち其物を捨て、其の義を取らば其の泛濫自肆せざるもの幾希ぞや、是れ韓柳程朱以後の失なり。とて六經の最も重んずべくして研究對象の第一に置くべきを主張し、更に一轉して其の研究法に入り、夫れ六經は文なり故に孔子を學ばんと欲するものは必ず文章より始む。と觀破して専ら古文辭研究に餘念なく、必ず諸を六經に求めて以て其の物を識り、諸を秦漢以前の書に求めて以て其の名を識る。とて敢て眼を東漢以後の書に寓

せずして曰く、妄意以謂らく、詩は開天を下らず、文は則ち西京以上務めて自ら杼軸を出し、人の牆下に循ひて走らず、唐は唯韓柳(韓退之柳宗元にて文)明は唯王李(李千麟王元美にて徂徂が古文)此より以外は歐蘇(宋の歐陽修蘇東坡に)の諸名家と雖も亦爲すを屑しとせざる所なり、何ぞ況んや輓近をや。と其の抱負知るべし。而して此の研究方法を執つて古書を讀破したる結果は、孔子の道は先王の道なり、先王の道は天下を安んずるの道なり。との結論を得之を取りて自家の主張となし、あらゆる思想を此に結合せしめ、あらゆる方法をこれより出發せしめたり。即ち先づ古聖人の道も教も、後儒の申候様なる理の六借事は決して無之筈なる事明に候。とて、極めて卑近日常のことに解釋したるのみか、聖人の教を以て、わざなり、世は之を道術と謂ふ。と見て取りしかば、宋儒等

の唯心説は此に變じて實際的常識的のものとなれり。而かもこの先王の教の術は自然的徳化的にして詩書禮樂の外あることなしと論斷して曰く然れども其の教の法は詩は誦と曰ひ書は讀と曰ひ禮樂は習と曰ふ春秋教ふるに禮樂を以てし冬夏教ふるに詩書を以てし假すに歳日を以てし陰陽の宜しきに隨ひて以て之を長養し學者をして其の中に優柔厭厭せしめ之を藏め之を修め焉に遊び焉に息まば自然に徳立て知明かならん要は習うてこれに熟し久うしてこれに化するにあり是れ古の教法を爾りとなす。論語に所謂博文約禮は是なり。と。之を以て學を志すものは只この四つを修得すれば可なり實に之の四なるものは聖人の教の全體なればなり。されども尙ほ一步を進めて考ふれば更に之を辭と事とに節約す

ることを得べし何となれば不妄謂へらく詩書は辭なり禮樂は事なり義は辭に存す禮は事に在り故に學問の要は卑く之を辭と事とに求めて高く性命の微議論の精に求むべきものにあざればなり。是れ聖人は知り難く亦言ひ現はし難き程至大至高なる主宰的天の無形の啓示を感取して之を人生化し有形的組織的に創作して道をなし常人をして悟り易く行ひ易からしめたる偉大なる人物にして其の聰明叡知の徳は元より先天的に享有し來りたるものなれば決して學んで至り得べきものにあらず常人は只この人の指導に則つて始めて天の默示に接觸することを得るものなりとの前提より出で來りしものなり。即ち徂徠は後儒の如く嚴格なる道徳を以て人に強ひ完全圓滿なる聖人の域に押しやることを斥け自然的徳化を以て唯一最良の主義なりとなせしも

のなり。  
然り而して、これが教養の結果實に吾人が學んで至り得べき最終  
點即ち教育又は修養の目的となすべき人物は何なるか、徠徂はこ  
れを仁人なりと思惟せり。これ孔門の教は仁を至大となす。所  
以にして、仁の一字は最も能く先王の道を擧げて之を體するもの  
なればなり。されども先王の道は元より多端にして人の性格も  
亦多數なれば各人全然一様の發達をなし同一形式に到着するこ  
と能はず、否同一形式となすことは反つて不自然にして、國家社會  
の爲め又不利にして危険なり。故に曰く、先王の道は要するに安  
天下に歸す力を仁に用ふれば則ち人各其の性とす所に隨ひて  
近く以て道の一端を得べし、由子路の勇賜子貢の達、求子有の藝の  
如き皆能く一材を成し、以て仁人の徳を爲し、共に安天下の用をな

すに足る、而して其の徳の成る夷齊、伯夷、叔齊の徳、惠、柳下惠の和、伊  
(伊尹)の任の如き、皆夫れ必ず其の性を變じ亦仁人たるを害せず。  
若し、或は力を仁に用ふることを識らざれば、其の材と徳とを損じ  
て皆成すこと能はず。而して諸子百家此れに由つて興る。と。  
造次顛沛の間も、仁即ち安民の徳を體する時は、個性の特質に應じ  
て徳を成し、遂に各々仁人君子の域に達することを得べし、されど  
も、初めより之を獲得することは至難なり、此に於て其の方法を説  
きて曰く、先王安民の徳は大なり、故に孔門の教は又必ず中庸に依  
る、所謂孝弟忠信是れなり、譬へば高きに登るは必ず卑きよりし、遠  
きに行くには必ず邇きよりするが如く、是れに由りて以て進まば  
庶くは以て高明廣大の域に到るに足らん。と。實に孝悌は徳に  
入るの門なり。何となれば、人は貴賤となく、父母あらざるなく、父



母之を膝下に生ぜざるはなし、他の百行の如きは、或は強壯にして乃ち能く之を行はんも、唯孝は幼より行ふべし、他の百行は或は學んで能く之を行ふこと能はざるにあらず、唯孝は必ず誠に之を求め、然れども、學んで能くすべからず、親は身の體なり、身は親の枝なり、故に人君は必ず以て其の志を繼ぎ、其の事を述ぶるを孝の至りとす、臣下は必ず以て身を立て名を揚げ、其の父母を顯はすを孝の至りとす、唯孝は以て神明に通すべく、唯孝は以て天地に感ずべし、是れ其の至徳たる所以なり。と。かくて小を積んで大に至り、身を脩め、家を齊へ、以て成徳に達すべきなり。されども、修身齊家は其れ自身に於ては左程の價値なきものなり、何となれば、仁人の一徳にして、僅に個人の處置をなすに止まればなり。然るに吾人には、社會國家及び人類に對する務あり、故に高能有識の士は更

に進んで國家の爲政者となり、仁以て天下に望み、衆を教へ、民を安んじ、衆庶をして其の處を得しむることを念とせざるべからず。是れ人類の至るべき最高完全の域なり。而してかの我一身を修むる所以のものは、上に立つものは必ず衆目の中心となるを以て、其の身正しからざれば、威信を保つこと能はざるを以てなり。故に修身は方便にして、治國は其の目的なりと考ふるなり。即ち徠徂の思想は到底この治國安民を離れて存せざるなり。以上は徠徂が解したる倫理觀、即ち道の大要なり。而かもこの道なるものは、信すべきものにして、究むべきものにあらず。何となれば、道は天地自然の道にあらず、皆吾が先王が造れる所なればなり。殊に伏羲黃帝より……數千年を更へ、數聖人の心力、知巧を更へて成りしものにして、一聖人が一生の力にて能く辨ずる所の

者に非ず、故に孔子と雖も、亦學んで而して後に焉を知る。なり。かく完美せるものなるを以て、小智小能のもの、私心を通過せば又小とならざるを得ず、さるに「思孟而後降て儒家者流と爲りては始めて百家と争衝す、自ら小にすと謂ふべし。」然れば是等の輩が吾が説の爲めになしたる唱道は如何に精緻高妙のものありとて、之を取らざるべき理由なきのみか、寧ろ陋として排斥すべきは自然の結果なりと。故に徂徠は仁を謂ひて仁義を謂はず、性の善惡を論せず、理氣人欲を説かず、王霸の辨を謂はず、五常を立てざるなり。

第三 學藝の方面

言語 徂徠が古文辭の批評を以て歴史的に經書の討究をなし、頗る言語文章の上に貢獻したることは、既に其の一斑を述べたりと雖も、尙此に精説せん。

「世は言を載せて以て遷り、言は道を載せて以て遷る。」諸を道に求めずして諸を辭に求む。とは即ち總じて學問の道は文章の外無之候、古の道は書籍に有之候、書籍は文章に候。然る所文章も、字義も時代に隨て展轉致候所、眼の付け所にて候。の意なり。是れ徂徠が獨創の見解にして、他學者の思ひ當らざる所なり。言語思想に生命あることを知らざりし彼等は、徂徠によりて初めて其の貴き理を教へられたるなり。

文章 徂徠以前の文章界は専ら達意を旨としたりしが、徂徠は夫れ文章の道は達意修辭の二派ありて、聖言より發す。其の實二者は相須つべきものにして、修辭にあらざれば、則ち意を達するを得ず、故に三代の時は二派未だ嘗て分裂せざりき。とて修辭の必要を唱へ、矮人看場の世間が韓柳の體に酔ひ文章は只議論體のみと

思へるに對して、殊に知らず議論叙事の二者は文章の大綱領なり。とて大に叙事體の必要を説き、尙ほ議論體の外に醇雅なる叙事文體あるを教へ簡にして文なる古文を味ふべきことを勸告し、幼稚なる文章界に向ひて一定の系統を與へんと努めたり。徠徂は當時に於ては及ぶべきものなき程文章に秀でたり。是れ人も許し自らも任ずる所なり。而して其の文體は勿論擬古文體にして醇味頗る掬すべし就中峽中紀行天狗說學則第一等は其の最たるものなりと稱せらる。文會雜記にも春臺も學則第一は眞の古文なるべしと云はれたり又君修も日本にて眞の古文といふは學則第一又は南郭集の中のみなるべしとあり。今是等の文章は何れも載せて徠徂集中にあり。徠徂は此の如く博識にして古文に精密なりしと雖も、今文は餘りに顧みざりしを以て後世の

書はさのみ精しからず。といはれたり。譯文。徠徂は多大の力を譯文に注ぎたり。和文漢譯も然り、模範文として掲げたるは譯文筌蹄の初めにあり、殊に漢文和譯即ち讀書法につきて思考せるもの多く、今の學者經學にても詩學にても文學にても、例へば佛學にても醫學にても、此の譯文の學をせずんば、唐人詞に通せざる故どりこし問答なり、成就することあるべからず。今時大儒と呼ばるもの、書きたる文、又は書を講ずるに誤り多く、又儒道を行ふとて怪しき風俗になるも、皆唐人詞を合點せず、笑しく心得る故なり。とて廻環順逆なる從來の讀み方を斥けて俗語にて義譯すべしと云ひ、更に進んでは今の外國語を讀むが如くに支那音を以て直讀し去るべきを唱へ、自ら譯社を結びて同志を會し、長崎の人岡島冠山を聘して研究に力めたり。

和歌及び音楽 和歌には餘り力を用ひざりしもの、如く一生に一首を作りしのみと云はるゝも、頗る音楽を研究し、樂器製作者が徒らに数理によりて律呂を定むるのみにて、耳に依りて之を驗せざることを非難したる程なり。鈴木秋敬曰く「徠徠先生樂律の説卓見多し、然れども信用し難きことも亦少なからず。」と、これ公平の批評なるが如く、専門家も及ばざる程の智識ありたるは事實なるが如し、されども元より音楽の天才ありしにはあらず、無器用の人拍子きかず、勉強精力を盡して樂を學ばれたり。」となり。

書 書は後世の字學者流の如く、正偽偏傍等を是非せず、唯六藝の書にあるが如く、音字と字音を識るに止めたるが楷書に不得手にして一種特別なる草書のみ書きたり。而して曰く「古書は古雅言ふべからず。」と。

數學 多能なる徠徠も數學には秀づること能はざりき、されども文會雜記に「徠徠は算用ならず、唯紙のはしなどに書付けて數をとりなごし、これにて度量衡をせられたり、伶俐不可當これにて知るべし、唯八算まで覺えられたる由、それ故度量衡に少し違有るよしなり、春臺は精しく改めて字を直したりと、君齋語りける。」とあり。

この氣魂が諸多の事を成就せしめしなり。

曆學 數學に不得手なりしかば曆をも深くは學ばざりき、されども臆を以て之を道ふといふを以て見れば少しの心得はありしなり。

繪畫 繪畫に於ても見識を有し、今の畫師が自然界に接せざるは斯道の一大障礙なりと論せり。

政治經濟 徠徠の修學の目的は治國安民にあるを以て、政治經濟

には造詣せる所多く、封建政治を以て先王の道を實行するに最も適したるものとし、井田の法は所謂今の隣保組合に外ならずとし、華奢淫猥にして政教不備なる元祿享保の社會を救はんが爲めには先づ當時の二大缺陷を擧げて、世界旅宿の境界なること、庶民は恒産を有して一處に定住するに至らず、諸大名は參勤交代をなして常に旅行中にあらざるべからず、殊に都會地にありては借家住居多く人々皆その日くを宿屋に送る心持にて落つきなし、之を以て現代的にして遠き將來を考へ、廣く國家社會の上を慮る如き計畫的の事業も精神も施設もなし、是れ世界旅宿の境界なり。諸事の制度なきことなりとなし、これに對する方略を論じて、戶籍を立て萬民を住所に有り付けること、町人百姓と武家と制度の差別を立つること、大名の家に制度を立つること、御買上と云ふこと

の之なきやうにすること、の四を擧げ、大體是れにて世界はすぐなをり豊になるべし、其の外事は是れに連れて自ら直るべし、と結び。されども元祿の貨幣改鑄を賛し、悪貨出で、善貨隠るてふ原則を否認したるは徠祖にも似合はざる所にして、或は爲めにする所ありしにはあらざるなきか。兵學 徠祖は其祖先の故を以て少時より兵學に精しく、殊に晩年は専ら力をこの方面に用ひたり、熊本なる細川侯の臣藪震菴と初めて見たる時出し、抜けに足下は西海にそだちたれば先づ舟軍をば如何したまうべき。と問ひかけ、數刻兵を談じて他に及ばざりしことあり。元日に孫子を読みて之を論じ、遂に南郭をして祝賀の詞を述べること能はずして去らしめたることあり。松宮觀山は學論に於て、近日儒士の武を談ずるは徠物子一人而已。其の

著はす所の孫子解及び鈴録は涉獵殆んど盡すと雖も……未だ  
事術磨練の功を見ず。」と評せり。  
雜藝 用兵術に寓して廣象棋なるものを發明したることあり、鼠  
の嫁入の説を説きて好判官大岡忠相を驚かしたることあり。實  
に徠徂は當時の書を読み盡したるのみならず、亦社會を読み盡し  
たりといふべし。

第四 教育に關する著書

教育に關する徠徂の意見には卓越奇抜なるもの多しと雖も、纏り  
たる書冊とてはなく諸書に散在するに過ぎざるなり。今これが  
参考に資すべきものを選んで解説を試みむ。  
一、辨道辨名 この二書は徠徂が復古學的儒者としての一家の見  
解を發表したるものなれば、其學説を知るに最も重要なるものに

して、辨道は如何なる道が先王の道なるかを明らかにし、辨名は徳  
目を擧げてこれを解釋したるものなり。この書の校正は春臺と  
南郭と立ちあひにてなし、蚤く支那にも翻刻せられ、其の小傳は梅  
溪錢泳の撰む所となり、註解書又多し。

二、徠徂問答 徠徂が人の問に答へたる國字の書類を收載したる  
ものにして、又其の主張を知るに足る。

三、論語徵 辨道辨名と等しく奉孔子教的主張を述べたる重要な  
著書にして、序文に孟子有言曰、無乎爾、則亦無有乎爾、豈謂今之時與、

是以妄不自揣、敬述其所知、其所不知者、蓋闕如也、有故、有義、有所指摘、  
皆徵諸古言、故合命之曰論語徵とあり、内容如何を知るに足るべし。

四、徠徂集 徠徂の没後、門弟服部南郭、平竹溪が其の詩文集めた  
るものなれば、文章以外に種々の思想行爲を窺ふことを得べく、殊

に書牘には主張を述べたるもの多し。  
 五、譯文箋諦「此方の學者は方言を以て書を読み、號して和訓と曰ひ、之を訓語の義に取るも其の實は譯なり。」譯の一字は讀書の眞訣なり。」と云ひて譯の必要を説き、祇だ中華と此方と語音同じからず、故に人は奇特の想をなす、能く其の語を譯して此方の平常の語言の如くなれば能く讀書するものといふべし。此れ是の編の開卷第一義なり。」と以て其の意のある所を知るべく、一々字を掲げて其の意味文法を説明したるものなり。勿論邦文なり。  
 六、訓譯示教 邦文にて認めたる文法書にして字品字勢を論じ、字の八用法を説明し、如何に譯すべきかを教へたるものなり。  
 七、政談 文會雜記に徂徠の政談は御小姓の本にありしを赤星子蘭ちよと見たりとなり、徂徠の手より直にさし上られたりとなり。

夫故草稿もなきとかなり。」と是れ徂徠が幕府隱密の御用に與かりし時の政見にして、吉宗の命により小姓等に授けん爲めの物にして、草稿もなきは機密漏洩を恐れしなり。政治問題、社會問題あり、教育行政上の意見あり。邦文なり。  
 八、太平策 將軍の下問に對して政治上の意見を述べたるものなり。  
 九、護園隨筆 本書は朱子學によりて仁齋を攻撃したるものにして、教育上にはさしたる價值あるものにあらず。  
 一〇、護園遺編 凡例に「此書也、先生ノ座右ニ置キテ、鄙語俚語ノ事ト雖モ見聞スル所ニ隨テ雜記ス、故ニ事實辨ナシ、賭漫ノ書ナリト賤シムコトナカレ。」とあり。傳記あり、字の説明あり、軍談あり、逸話あり、邦文なり。

一、四家傳 初學者の爲めに編集したる名家文集にして當時は室町時代の賈人が編纂したる古文眞寶及び謝氏が科擧の爲めに作りたる文章軌範等より外に良書なきを慨し、六朝の弊、韓柳理を以て之れに勝ち、別に門戸を開く、宋元の弊、李王辭を以て之れに勝ち、復古の業、始めて備はる。復た千歳を経、雖も唯此の四家は作文の規矩準繩たるなり。とて、韓柳李王の四家中より選拔し來り、六經十三家に至る階梯としたるものなり。其の他尙ほ多少の参考に資すべきものなきにあらざれども、さしたるものにあらざれば大方になし置くべし。

本論

第一章 總論

第一節 道德教育を主とす

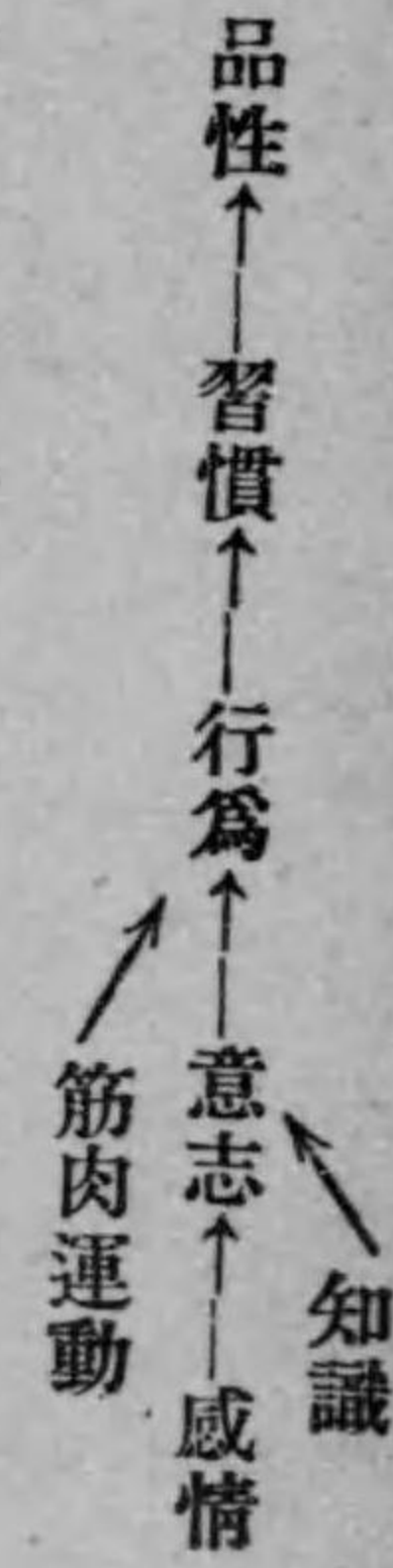
蓋し往昔未だ科學發達せず、事業起らず、加ふるに心理學、生理學、社會學及び醫學等教育に關係ある學術の研究不十分なりし時代にありては、知識技藝の尊むべく、身體の重んずべき所以を熟知するに至らざりしは、東西其の軌を一にする所なるが、これに反して、道德は形而上の學と共に早くより唱へ出されしを以て、昔の教育が道德のみに重きを置きしは、自然の結果といふべし、然れども教育が人格の完成を目的とし、品性の確立を主眼とする以上は、この道



徳教育の尊重すべきことは、現在に於ても又遠き將來に於ても決して變化あるべからざることなり。但し彼と此との異なる所は、過去に於ては知育及び體育を顧みること少なくして徳育のみに殆んど全力を注ぎしことなり。換言すれば教育即ち道德教育にしてこの以外に何者もあらざりしことなり。

徂徠は其の時勢が示す如く道德教育を主とし、知育殊に體育を論ずること少なかりき而して其の主義は純儒教主義なりと雖も亦自ら特異の見識あり。即ち其の主張に曰く、夫先王之道、莫大於仁焉、仁也者養之道也、以安民爲大焉。(辨道)と。是れ徂徠の常套語にして又教育の目的及び方法を示したるものなり。即ち安民は其の目的にして養は其の方法なり。謂へらく、教育は術なり、聖人は民を養はんが爲めに教の四術を立て、詩書禮樂を分てり、詩則諷詠

書則誦讀、禮則節文、度數、樂則歌舞八音、其爲教各別、而大非後世專以挾策爲教者比、後世乃專以讀書講理爲學、故其於四者亦皆以讀書之法求之、所以不得先王教之法之妙也。(辨道)と。然り道德教育は決して一片の讀書教授の克く爲し得べきものにあらず、知識教育は道德教育上元より必要なりと雖も、道德活動の根元は意志の鍛練にあり、意志は無意的身體活動より發源して有意的活動となり、絶えず道德的習慣を養ふことによりて遂に品性を形成するものなり。されば品性陶冶は困難なる事業にして、其の箇人に對し幼少の時より絶えず道德的習慣の練精蓄積をなさしめざるべからず、故に能く考へられたる具案的の教術に依り一は彼を勵まし、一は環境の整頓を圖り、内外呼應し、訓化脩練して後に得らるべきものなり。然るに品性陶冶の心理的方面を眺むれば



の如き關係に立つものにして、行爲の根元たる意志は外部に發せんとして、筋肉運動即ち身體的活動の力をかるべく、更に其の發動に際して知識の先導及び感情の後援に依らざるべからず、而して知識は與へ易く感情は養ひ難く習慣は成り難し、故に古來道德の修練を説き徳性の涵養を叫ぶもの皆悉く心情の涵養を重んじ、習慣の養成に努めざる者なし。徃徂はこの點に着眼すること強く、詩書殊に禮樂を執へて知情意及び筋肉運動の調和的活動の發達を圖らんと努めたり。即ち曰く詩書は義の府にして正言微辭を知らざることを得と雖も、先王の道を我が身に體し吾と同化せしめん

には具體的にして感情的有形的なる禮樂に依らざるべからず、樂は徳性を養ひ禮は行爲を規制し、禮樂者徳之則也。禮樂不言、能養人之徳性能易、人之心思（辨道）を以てなり。蓋し禮樂の特性は無意的薰化的なる所にあり。故に吾人はこれによりて絶えず體形を正し、美的道德的情操を養ひ、覺らずして自然に其の域に達せしむる様に仕向けざるべからずとなし、遂に禮樂を以て教の術の中心となすに至れり。

第二節 人文主義的傾向

歐洲に於ける人文主義の思潮は中世期の宗教的出世間的超自然的思想に束縛せられたる反動として起りしものにして、社會の先覺者は腐敗せる耶教思想以外現世的人間的自然的なる希臘羅馬

の思想あることを知り、大早に雲霓を望むの勢を以てその古典的  
 人文に憧憬し、切りにこれが復興を計り、これに依りて以て人の人  
 たる性能を養ひ、人生の歸趣を定めんとしたるものなり。これ文  
 藝復興の精神にて、十四世紀頃先づ我國の京都とも稱すべき古典  
 に關係深き伊太利に起り、ダンテ、ペトルカ、ボツカチオ等の先覺  
 者を経て、十五世紀に入るや、コンスタンチノールの陥落と共に  
 羅馬の學者を移入して更に旺盛となり、遂に十六世紀に至つて獨  
 逸和蘭西班牙英吉利等の諸國に傳播して歐洲の思想界を横斷す  
 るに至り、獨の Erasmus 西班牙の ビーヴ等教育史上顯著なる人  
 物の輩出を見るに至れり。而して教育上に表はれたる人文主義  
 の特色を擧ぐれば次の如し。

1. 美的陶冶を重んじたること、感情教育に重きを置き、理想を尊

び、言語を重んじ、文辭を以て單に思想を傳ふる記號とのみ見ず  
 して、文辭其の物の形式即ち修辭を重んじ、教材の選擇に際して  
 も希臘時代の戯曲等を多く採用せり。

2. 個性を尊重したること、中世紀の風潮は宗教又は貴族等の勢  
 力強盛なる爲め、是等の團體の爲めに個人を犠牲に供するを本  
 則とし、個性の發揮を許さざりき、然るに人物主義はこの思想に  
 反對し、現在に於ける人類の慾望を重んじ、人間精神の自由にし  
 て圓滿なる發展を要望したるを以て著しく個人の満足と個人  
 性の發揚とに努めたり。
3. 古典を重んじたること、人文主義の理想は希臘及び羅馬殊に  
 希臘の文化によりしを以て、古典は唯一無上の寶典にてありし  
 なり。

之を要するに、人文主義の長所は、典雅なる品格を養ふに、あれども、其の短所は、浮華の風と貴族的趣味とを添加する所にあり。而してこの主義と相對し、氷炭相容れず、後年永く論争の具となりしは、實利主義にして、實物を主とし、經驗を重んじ、實利實用を貴び、以て近世に於ける物的科學の發展と共に、次第に勢力を増進し來れり。かくて十九世紀に至りては、人文主義が徒らに文辭を弄するの弊を知り、古典の研究は、唯に修辭の爲め、みに止まらず、その内容によりて、人性の多面的調和的發展をなさしめんとし、茲に新人文主義を生じ、ゲーテ、シルレルの如き文學者及びウキルヘルム、フオノン、ポルトの如き大教育家を出したり。かくてこの思想は、ベスタロツチによりて、實際に表現せられ、情意的教育の精華を發揮したり、然るに最近に至り、又主智的教育の弊害に堪へず、その反動

として、情意的教育を力説せんとする、人格的教育學、現はれ、新らしき一閃光を放つに至れり。之を要するに、この思潮は、人性の美點を發揮せんとするものにして、古代より現時に及び、實利主義の教育と相對して、教育界の二大潮流を形成せるものなり。以上、縷陳の人文的思想を以て、徠祖の主張を窺ふに、殆んど全體に於て一致せるものあるを認めざるを得ず。即ち徠祖は、復古學を唱へて、古典の研究を第一とし、(序編第五節) 問及び著書第二學派及び學說參照、朱子學に反對して、個性の發揮を力説し、(本編第一章) 總論第三節、個性の發揮參照、文學及び禮樂によりて、感情教育を施し、美的趣味の養成に意を用ひたり、(序編第五節) 學問及び著書第二學派及び學說參照、然れども、徠祖は十六世紀の人文主義者の如く、單に文辭の形式的取扱のみを重しとせるも

の、に、あ、ら、ず、其、の、文、辭、の、研、究、を、な、す、は、支、那、中、世、以、後、の、諸、家、の、言、議、  
 に、よ、り、て、誤、ら、れ、ざ、る、孔、子、教、の、真、髓、を、得、て、人、道、の、大、義、を、闡、明、せ、ん、  
 が、爲、め、に、し、て、其、の、新、鮮、な、る、仁、義、の、思、想、に、よ、り、て、人、生、の、歸、趣、を、明、  
 ら、か、に、し、以、て、道、德、的、修、練、を、な、さ、ん、と、欲、せ、る、な、り。則、ち、曰、く、夫、六、  
 經、者、文、故、欲、學、孔、子、者、必、自、文、章、始、。必、求、諸、六、經、以、識、其、物、求、諸、秦、漢、  
 以、前、書、以、識、其、名、。故、に、こ、の、點、に、於、て、は、單、に、詞、の、み、を、採、ら、ず、古、代、  
 の、思、想、を、も、採、取、せ、ん、と、す、る、新、人、文、主、義、の、傾、向、と、類、似、せ、る、も、の、な、  
 る、を、知、る、べ、し。  
 更、に、考、ふ、る、に、徠、徂、の、人、文、主、義、は、單、に、個、人、心、性、の、圓、滿、な、る、發、達、を、  
 企、圖、す、る、に、止、ま、ら、ず、進、ん、で、國、家、社、會、に、貢、獻、す、べ、き、有、爲、の、人、物、と、  
 な、る、べ、き、事、を、理、想、と、せ、る、を、見、る、べ、し。則、ち、曰、く、た、と、ひ、い、か、程、心、  
 を、治、め、身、を、修、め、無、瑕、の、玉、の、如、く、に、修、行、成、就、す、其、下、を、わ、が、苦、世、話、

に、存、じ、候、心、無、御、座、國、家、を、治、む、る、道、を、知、り、申、さ、ず、候、は、い、い、か、の、益、  
 も、無、之、事、に、て、候、。 (問、答、書) と、こ、れ、修、身、は、方、便、に、し、て、治、國、安、民、は、人、  
 生、の、最、高、目、的、な、り、と、の、信、念、よ、り、來、る、者、な、り。太、平、策、に、曰、く、身、を、  
 修、む、る、を、推、及、ぼ、し、て、其、餘、を、以、て、民、を、治、む、る、と、を、い、ふ、に、非、ず、と、以、  
 て、其、の、精、神、を、推、知、し、得、べ、し。之、を、以、て、雖、非、先、王、之、道、凡、可、利、人、救、  
 民、者、皆、謂、之、善、。 (辨、名) 能、合、億、萬、人、而、使、遂、其、親、愛、生、養、之、性、者、先、王、之、  
 道、也、學、先、王、之、道、而、成、德、於、我、者、仁、人、也、。 (辨、道) と、い、ひ、常、に、利、用、厚、生、  
 に、盡、瘁、す、る、を、社、會、先、覺、者、の、任、務、と、思、惟、せ、る、を、知、る、べ、し。故、に、徠、  
 徂、の、人、文、主、義、は、恰、も、獨、逸、に、起、れ、る、新、人、文、主、義、以、後、の、思、想、の、如、く、  
 實、利、主、義、の、所、說、を、も、包、容、せ、る、も、の、な、り、と、い、ふ、べ、く、又、以、て、最、近、教、  
 育、學、の、思、潮、に、も、近、づ、け、る、を、知、る、べ、し。  
 徠、徂、の、思、想、が、此、の、如、く、西、歐、に、起、れ、る、人、文、主、義、と、暗、合、す、る、に、至、り

しは是れ全く兩者が復古的態度を執れる所に基因せるものなり  
 と云ふべしと雖も亦當時の社會が科學の影響を受けず實學の發  
 達幼稚なりしと共に徠祖が常識に秀で實際を尊び實益を重んぜ  
 し所にもよらざるべからず。

### 第三節 國家社會的傾向

西洋に於ける教育主義の變遷を見るに古代及び中古に於ては各  
 時期に従ひて特色ある偏狹なる社會主義の傾向を有せることは  
 疑ひなきことにして或は國家及び宗教の必要上唱へられたること  
 とあり或は階級教育等の爲めに主張せられたることあり而して  
 中世の末葉及び近世最近世に至るまでは個人的傾向を有せる教  
 育主義専ら唱道せられたるが人道學派及び改革派は其の主要な

るものなりき就中エラスムス、メテンヒトンは殊にこの學派に重  
 きをなしたるものなり是等學派と共に有名なるものにコメニウ  
 スあり、ランドルフ、スツルムあり、僧侶あり、博愛論者あり、特に一家  
 見を立てたるものにはモンテー、ロツク、ルソーあり、ベスタロツ  
 チ及び其の徒あり、就中デイステルウエツヒはベスタロツチ派の  
 雄將を以て稱せらる、更に近代に至りヘルバルト及び其の學派あ  
 りて氣勢再び振はんとせり、この學派には有力の學者多く、ストイ  
 あり、チルレルあり、更に之を祖述せるものあり、ベネツケ及び其の  
 繼續者デイツテス等あり、ベスタロツチ以下には社會的傾向を混  
 ずるを見る、かくて最近に至りサーチ、エレンケー及びグールツ  
 ト等の極端なる個人主義論者輩出して盛にルソー主義の復活に  
 努め、箇人の自由及び個性の發揮を尊重し、從來の干渉壓迫主義の

排斥すべきを極論しつつあり。是等の人々の主張には時代により人により、多少の相違あれども、之を概括すれば、箇人の發展を以て教育の標的とし、人間を人間に教育せんことを期せしなり。而して一方を見れば、これと正反對なる社會的教育主義は、漸く頭角を表はし來り、ヘルバルトと略ぼ時代を同じうして哲學者へーゲル出で來り、茲に社會主義の哲學的建設をなしたり、少し後れて佛蘭西にコント出で、社會學を組織してより、この主義は次第に盛となり、晩近に於ては、漸く箇人主義を厭して一時教育上の主權を握らんとせしことあり。即ちこの主義の代表者はウキルマン、ナートルプ、チーグレル、リスマン、トゥリユツペン等にして、社會の維持發展の爲めに、箇人を教育せんとするものなり。然れども最近教育學の進歩は、人類の生活上の位置を明らかにし、人は社會的

個人なりとの結論を得、個人主義も社會主義も共に人類の一面觀なるを知り、遂に兩主義を折衷するに至り。然れども其の折衷の程度たる元より、絶對的の標準あるにあらず、社會の現状と其人の見識とに依りて定むる實際のものなるを以て、第三者より之を觀察すれば、兩者何れかの色彩を帶ぶることを免かれず、即ち人格的教育學の如き、調和主義のものにても、稍個人主義的なりとの批評を受くる程にして、新教育と稱する者にありては、ケイ、グーリット等、信じて個人主義の鼓吹に努め居れり。然れども此の二主義は、遂に調和點を求めざるべからず。この二思潮の發達は、東洋に於ても略ぼこれと經過を同じうせり。元來佛敎は個人主義なり、耶蘇敎も然り、儒敎も亦多くこの傾向を有したり。然れども、これ所謂儒敎の思想にして、孔子敎の思想に

はあらざるなり。儒教とは支那の民族的教義にして支那の土地と歴史とを背景とせるものなり。然るに孔子教は孔子が先聖の道を集めて大成せるものにして、實に世界的教義に屬し、東亞及び歐洲の天地にも普及しつゝあるものなり。即ち儒教の箇人主義的傾向は支那國民性の表現にして、其の根原は實に義の義にあり。義は孟子によりて唱道せられたるものにして、仁の自己犠牲に對して、自己保存を意味し、正我の觀念より轉じて權利思想となり、以て個人的實利的方面に發展せるものなり。然れども孟子の仁義併稱が直ちに個人的實利的意味を表はすものなりといふにはあらず、孟子の思想は孔子の意と相距る遠からずと雖も、仁より離れて義の一方面より説く上より見れば已に個人的方面の閃光を認むべきものにして、後世の儒者好んでこの義を主張するに至り、遂

に個人的實利的方面に傾くに至りしなり。彼の宋儒が至公無私を以て仁を説明せんとするが如きは既に義の私と相對して意味を成し居るを知るべし。元來義は孔子以前にも存在し、孔子も亦義を口にせざるにあらず、然れども孔子の義をいふや、仁を節するを主とし、決して個人的實利的の方面を以てせず、且義を説くこと少なく、常に多く仁を言へり。夫れ仁は「成己仁也、成物知也、克己復禮爲仁」の語にて最も明瞭なる如く、實に自我實現人格完成を意味するものなり。彼の中庸に孔子の道を説明して知仁勇を以て天下の道德と爲したるは、孔子の仁が理性感情意志の調和的發達を主眼としたるをいふものにして、能く孔子の微言を闡明したるものなり。既に人格の實現なり、故に人倫の全方面に互りて至らざるなし。



人倫とは何ぞ、父子、夫婦、兄弟、朋友、是れなり。即ち君臣は國家的生活に於ける人と人との關係、父子、夫婦、兄弟は是れ家族的、生活に於ける關係、朋友は社會的、生活に於ける關係にして、之を綜括すれば人と人との關係を意味すべし、故に推して之を廣むれば社會的、生活に於ける對人關係の全局面に及ぶべし。之を以て孔子は家族的、道德を説きて祭祀を重んじ、郷黨の自治的組織の發達に對して社會的、道德の本務を教へ、尊王の大義を明らかにし、政治的天命説を否定して革命思想を抑へ、以て國家的、道德の興隆を圖り、更に對人類關係としては夏夷の別を立てず、又人に階級を設けず、人材を舉げて治國平天下の任に當らしめんとせり。

かく觀じ來れば孔子教に於ては儒教主義と異り、社會的、國家的、傾向顯著にして、現時の倫理主義又は教育主義の如く個人對社會的

要求の調和をなせるものなるを見るべし。されば服部宇之吉博士は儒教倫理概説の結論に於て曰く「若シ夫レ孔子教ニ至レバ個人ヲ家族社會又國家ト結びテ一面ニ個人の人格ヲ重ンズルト同時ニ、一面ニ大ナル結合ノ一員トシテノ道ヲ説キ以テ兩者ヲ完全ニ調和セントス。今後ニ於ケル世界ノ倫理思想ハ必ズ孔子教ノ旨ニ一致スルコトヲ疑ハズ」と斷言せり。

之を以て孔子教の復興を圖れる徂祖は其の社會的方面の力説をなして曰く「故人之道非以一人言之、必合億萬人而爲言者也、今試觀天下、孰孤立不群者、士農工商相助而食者也、不若是則不能存矣、雖盜賊必有黨類、不若是則亦不能矣、故能合億萬人者君也、能合億萬人而使遂其親愛生養之性者先王之道也、學先王之道而成德於我者仁人也、」(辨道)と。これに依つて見るも徂祖は個人の外に社會の存在

を認め、ギツディングの如く社會活動の單位は共働にあるを知り、箇人は社會の一部として初めて生を全うすることを得るものなるを悟り、人生の最大事業は治者となりてこの萬民を統治し、化して先王の民の如くならしむるにありと爲したるなり。然れども茲に一つの疑問あり、徂徠の教育目的が此の如く社會國家に貢獻すべき君子人の養成にありとすれば、治者のみ多くして被治者の無きに至ることこれなり。即ち徂徠の見解は純理としては不徹底なりと雖も、實際の經驗上人間の發達には先天後天の兩方面よりの制限ありて、其の至り得べき程度同じからず、只其の優秀なる者は治國平天下の任に當ることを得るなり。これ孔子教及び儒教の思想には人間に門閥又は階級を設けず、修養の成果に依りて人材を登用するを方針とすればなり。故に實際上に於

ては些少の支障あることなし。これ徂徠の思想が實際的常識的なりと稱する所以なり。

### 第四節 個性の發揮

人には通性と個性とあり。通性は社會の構成に必要な要素にして團體教育に根柢を與へ、個性は社會の發展に必要な要素にして教育充實の経路を示すものなり。蓋し通性に偏すれば教育は形式的劃一的となり、個性に偏すれば人格を破壊し、又社會心を消磨せしむる恐あり。故に個性の發揮を圖らんと欲するものは通性の發達に注意すべく、通性の發達を企圖せんとするものは時に又個性の發揚に顧慮する所なかるべからず。而して社會主義の教育は通性に根據を有し、個人主義の教育は個性の差異に立



は宋學の餘を受けたるもの多く、専ら唯心的、主觀的研究を主とし、理想を高き處に求めんと力めし結果、人生の實際的研究を忘れ、心意發達の方則を無視し、唯すら先王の教を過重して、其の徳化力は無限に大なるものなりと誤信し、賢愚知不肖も悉く移して我が理想的人物、即ち聖人となし得べしと思惟したるを以て、個性の如何に關らず強て悉く之を一定の模型内に鑄入し去らんと力めたりしなり、語を換ゆれば、宋儒は人の個性を認めず、能力を分たず、人を一樣平等のものとし、其の完全の狀態は只聖人といへる知徳完全の一形式あるのみなりと考へたるなり、これ人類の心身發達の自然的狀態を知悉せざるものにして、演繹的思考的考察法に依りし誤謬の結果なり、此の如くんば遂に畫一的教育を施すより外途なく、寧ろ彼の人の子を賊することなるべし。故に徂徠はこれに反

對して「人生萬品、剛柔輕重、遲疾動靜、不可得而變矣。」(辨道)「聖人の教には聖人になれど申すことは無之候、聖人の教に従ひて君子になり候事にて候(問答書)と、先づ一矢を酬ひ、更に進んで其所論を開陳し、聖人は聰明叡知の徳を天に受け、其の徳は神明測るべからざるを以て得て學ぶべからず、得て窺ふべからざるものなり、然るに後儒が妄りに聖人たらんとするは不學にして、子思孟子の言を誤解したる故なりとし、難じて曰く「後儒乃不察、二子所以言之意、妄意求爲聖、於是乎、慾詳論聖人之徳、以爲學者之標準、遂有聖人之心、渾然天理、陰陽合徳、不偏不倚之説、是其操心之銳、以聖智自處、喜測其不可測者、而以不可學者強人人、其究必立德之至者、以律之、則其優劣、古聖人之徳、亦勢之所必至也、其説雖根於孟子、然所附蓋小小哉」(辨道)と、徂徠は元と人の天性を以て總て十全完備のものなりとせず、又總

て完全の域に達すべき可能性あるものとも見ず、反つて人の性格は多様多類にして其の能力も知愚賢不肖によりて發達程度に差ありとなしたるものにして、かの完全の域に入れる聖人とても亦人なる以上は個性の典型各異なるものなり、故に絶対に完全圓滿なる人物は只全知全能の神として理想界に求むべく、この現實世界に求むべからざるものなりと思惟せるなり。これ卓見なり。人は既に理想的に完全ならず、故に長所もあり、短所もあり、善も悪もあるべきなり、夫疾也者、與材俱生者也、安可去哉、(贈長大夫右田君書)と之を以て聖人の世と雖も惡事あり、雖先王之世、豈致刑惜哉、且惡也者、善之未成也、(同上)と是れ、徂徠が荀子の性惡說に賛し、人には道德的本能即ち性命以外身體的感覺的慾望即ち生命あるを知りし爲めにして、宋儒によりて靈妙なりとせられたる人間は、徂徠に

よりて始めて人間らしくせられたるなり、即ち宋儒の見は神祕的にして、徂徠の見は實際的なりしなり、而して更に考ふらく吾人人間には社會的可能性あり、相親相愛相生相成、相輔相養、相匡相救者、人之性爲然、(辨道)又教育的的可能性あり、人生萬品、剛柔輕重、遲疾動靜、不可得而變矣、然皆以善移爲其性、習善則善、習惡則惡、(唯下愚不移、(辨道))と故に適當の教育によれば個性は充分に發達することを得べきものなり、學則第七に曰く、天命之謂性、人殊其性、性殊其德、達財成器、不可得而一焉、孔門諸子、各得其性、所近者、豈仲尼之教者、所不足乎、譬如時雨化之、莫不生焉也、大者大生、小者小生、豈不欲小者大生邪、實命不同、君子知命、故不强之、及乎器之成也、雖聖人有所不及焉、故聖人不敢強之、是故人可皆爲聖人者非也、性可易者非也、君子之不器、水可舟而陸可車者非也、世俗所尙人也、非天也、(中略)命也者不

可如之何者也。故學而得其性所近亦猶若是。天達其才成器以共天職。古之道也。尙ほ曰く米はいつ迄も米、豆は何時迄も豆にして候。只氣質を養ひ候は其生れ得たる通りを成就いたし候が學問にて候。たとへば米にても豆にてもその天性のまゝに實りよく候様にこやしだて候ごとくに候。糞にては用に立不申候。されば世間の爲にも米は米にて用に立ち、豆は豆にて用に立ち申候。米は豆にはならぬ者にて候と(問答書)。人の個性は其の特性の示す方面に發達せしむることに於て効力あるものにして之を離れたる自己及び他人の理想によりて妄に改作することを得るものにあらずよし。善美の知巧を盡して改造したりとするも其の結果は恰も肥えたる米を得んとして瘦せたる糞を得たる農夫の如く徒勞にして損傷を招かざるを得ず。故に只個性に著はれたる特殊の諸能力を十

分に發揮せんとすること。教育者の最大義務にして又其の人にとりても世に取りても最も價值あるものなりとせるものなり。

### 第五節 自然感化主義

宋儒の鑄造主義に反對して個性の發展を重んじたる彼は、コメニウス等の如く自然主義を採るに至りしは當然の勢にして、前項の所説に於ても亦禮樂を重んじたる點に於ても知らるゝことなるが、徠徂は更に進んで、教育事業は自然が萬物を養育すると全く同一なるべきものにして、漸進的永久的事業たるべく寛大にして束縛的ならず、自然に自由に其性能の赴く所を遂げしめざるべからずとなして曰く、天地之道、往來不已、感應如神、爲於此而驗於彼、施於今而成於後、故聖人之道、皆施設之方、不求備於目前、而期成於它日、

日計不足歳計有餘、歳計不足世計有餘、使其君子有以自然開知養材、以成其德、小人以有以自然遷善遠惡、以成其俗、(辨道)先王之治使天下之人日遷善而不自知焉、其教亦使學者日開其知、月成其德、而不自知焉、是所謂術也、(同上)と、尙ほ進んで曰く、人ハ活物ナリ、故ニ人事ノ變日ヲ逐テ生ズ、是レ生々不息ノ妙用ナリ、カノ生々不息ノモノヲ手ニ捕ヘテ作リナサントスルハ強ク押ユルホド先ニテハハネカヘルコトヲ知ラズ、聖人ノ道ハ長養ナリ、造化ニ隨ヒテタテ、物ノナリユキヲ能ク知リテカクスレバ先ニテカクナルト云フ所ヲ合點シテワザノ仕懸ヲ以テ直ス時ハ目前ニハ遷遠ナルヤウナレ先ニ行キテ自然ト心ノ儘ニナルナリ、(太平策)と。是れ教育は心理上の方則に基きて其の方法を立つべきものなりとの現今の學說と一致せるものあるを覺ゆべく、近世の初頭に顯はれたる歐洲に於け

る教育改良家の意見と髣髴たるを知るべし。

### 第六節 自學啓發主義の鼓吹

自學啓發主義(は世上單に自學主義と稱するものあれども當らず、眞の自學主義は自學啓發主義な)唱道の聲は大正現時の教育界を風靡し滔々懸河の勢を以て流通せんとするが如し。しかも現時の如く我國既に世界的活動の氣運勃興せると共に、意的心理學及び機能的心理學等普及し、人格の心理闡明せられ、内外呼應して人心の鼓舞激勵を圖らんとする時に於ては當然普通の事なりと雖も、二百年以前に於て世は鎖國の間に閉され、人は享樂の淵に沈み、動もすれば醉生夢死の境界に陥らんとする元祿享保の時代に於て、徂徠が自學啓發主義の爲めに獅子吼したるは甚だ多とせざるべからず。しか

も其の所説が恰かも現時に於ける教授界の通弊を抉出し、吾人を叱咤せるかの如くに感ぜらるゝに至つては大に傾聴の價ありといふべし。  
之を教授法發達の歴史に考ふるに、自學啓發主義は教授革新の根本原理にして時と處によりて種々の形式を採ると雖も、學習法の真髓を穿てるものと云ふべきなり。即ち教授の材料あり故に之を傳授せざるべからずとなすだけの簡單なる動機より作用する所の教師の行動は之を注入教授と云ひ、最も朴素的のものにして只教へんが爲めに教ふるものなり。然れども本來教授は材料の傳達を最後の目途となすべきにあらず、其の傳達せられたるものが能く理解せられ、能く同化せられ、又能く應用せらるゝに至らざるべからず、此に於て教材を受納し之を活用すべき兒童の心的

状態を顧慮する必要起り、次第にこれに適應すべき諸種の教授法は發見せられたるなり。  
即ち、コメニウス等の如き教育改良家によりて新に唱へられたる自然主義の教授法は古來の注入主義に反對して蹴起したるものにして、客觀的自然主義より次第に主觀的自然主義となりて學習的心理の方則に合致せんとする努力を生じ、直觀主義となりてはペスタロツチに至りて其の頂點に達し、啓發主義となりては全世界を風靡するの勢を呈せり。蓋し直觀主義の教授は大脳皮質に於ける感覺中樞の開拓に根據を有し、自ら注意發動することによりて總ての智識の門戸たり基礎たる直觀を明瞭確實ならしめんとするものにして、兒童教育に缺くべからざるものなり。啓發主義は更に一步を進め、大脳皮質に於ける聯想中樞の啓發を貴



び復習殊に豫習を重んじ、問答法を用ひて既知によりて未知を誘  
發せんとするものなり。この方法は古くより發見せられ、希臘に  
ありてはソクラテス之を用ひて對話法の名を残し、支那にありて  
は孔子之を用ひて「舉一隅不以三隅反則不復」の金言を垂れ、以て東  
洋に於ける教授革新の源泉を作りたり。  
本來啓發主義は其精神より云ふときは人類天賦の本能たる自己  
活動の開展に根據を有し、學生の自助的攻究的氣根を鼓舞督勵し  
て其の注意力及び同化力を旺盛にし、構成的創作的諸能力の完全  
を圖らんとする意力鍛錬的なる自學主義に到達すべきものなれ  
ども、實際に於ては學徒の心力開發に忙はしくして教師の教授法  
のみ綿密となり、教師の働く部分徒らに多きを加へ、學徒の活動す  
べき餘地縮少せらるゝの餘弊を生じたり。之を以てフレーベル

の活動主義は其の反動として尊重せられ、米のパーカーに至りて  
自治心の養成を主とせる國家的活動主義となり、運動中樞運動神  
經及び筋肉の活動によりて注意力と發表力とを旺盛にせんと努  
め、漸く現時の要求に合致するに至れり。而してこの主義はゼー  
ムス、スタンレー、ホール及び其の他知名の學者によりて唱道せら  
れたるを以て、大に實際界に好影響を與へたり。然れどもこの主  
義は更に筋肉運動主義に依りて一層徹底的となり、ライ、モイマン  
ケルシエンシユタイナー、オシア等に依りて世上に紹介せられ、陽  
明學の知行合一説の如く、實行し發表せざる觀念は眞の觀念にあ  
らずと稱し、從來の學校を冷笑して、教授學校と呼び、所謂作業學校  
を創唱して、教師の教授的態度と學徒の學習的態度とを根本的に  
改革せんと努むるに至れり。

以上は教授法の發達史にして又自學啓發主義の開展史とも見るを得べきものなり。徂徠は元より現時の諸學者の如く科學的の素養あるものにあらずと雖も、自學啓發主義の要領を把へたるものにして、其の所説は悉く時弊に適中して革新の實を擧ぐるによろしく直觀を重んじ、啓發を貴び、自學活動を高唱し、言々句句甚だ肯綮に當るものあり、就中自學的主張は頗る徹底的にして、啓發より入りて活動主義の要領を含み、更に鬱勃たる攻究的精神を湛へ、元祿時代滔々として萎靡せんとする我國人の元氣を鼓舞し、從來の聽講的態度を一變せしむるに足るべき會心の新思潮なりといふべし。即ち太平策に於て彼方ヨリ求ムル心ナキニ此方ヨリ説カントスルハ説クニアラズ賣也と云ひ、徂徠集にありては、思之、思之、又重思之、思之而不通、鬼神將通之、と述べたる彼は作文の添削に

際し、十遍十五遍學徒の草稿を突き返して推敲を十分ならしめ、讀書は寧ろ看讀に若かずと云ひて講義式の教授法を極度に批難し、「試一閉戸讀書、累日所獲終不如一日所聞、坐收衆美、由是漸生卑劣心、貴耳賤目、廢讀務聽、與其幼々自攻、寧終身講席、此心一生前途遂畫、吾未曾見講惟下出名士、(譯文筆蹄題言十則)と口を極めて自學獨習を獎勵し、漢文の讀解方を改良して直讀訓譯法を創案し、或は廢讀務聽、貴耳賤目の結果より來れる師道の頹廢を慨して大に教權の確立を説ける等、自學的方法の開拓に對し、創見の數尠なからず。しかのみならず、武士の田園生活を獎勵して直觀を貴び、學問をわざと「術」事なりと解して學問と實生活との聯絡を明瞭にし、實踐窮行を勸め、利用厚生を説き、以て學習せる所のもの、發表實現に力めたり。蓋し徂徠の如く自學啓發を説けるは、教育史上又珍となすに足る

べし。若し夫れ具體的の事項に至りては後節讀書作文其他の教授法に於て詳細に説述する所あるべし。

### 第二章 道德教育

#### 第一節 儒教に依る

徂徠は儒者にして孔子の崇拜者なれば、德育の基本を儒教否孔子教に置くは元よりなりと雖も、其の理由は次の世界觀に據るものなり。即ち考ふらく、宇宙は不可解なり、人力の及ばざる所あり、只聖人獨り之を知ることを得、即ち聖人は天地鬼神に代りてその思索を實現する能力あるものなれば、學問の道は聖人を信するを以て先となすべきものなり、剩へその道なるものは大智大徳を有せる聖人が數千年の久しきに亙り、數人を更へて知巧の極を盡したるものなれば、この教に従ふより外に途なきものなりと。問答書に曰く、教に古今なく、道に古今なく、候、聖人の道にて今日の國天下も治まり候事にて、候外に仕形は無之候、聖人の教にて今日の人も才徳を成就候事に候、是又外に仕形無之候、古今通貫不申候ては、古聖人の道とも教共不被申候と。即ちこの信念を以て道德教育の根柢となし、更に道德の解釋に當り、宋儒及び其の流を汲むもの、如くに形而上的の哲理に訴へ、又は窮屈なる外形を有するものなりとはせず、極めて常識的に又極めて平易なるものなりとの見を、持し、以て道德の普及に貢獻せんと圖れり。即ち曰く、道も教も普ねく天下の人に被らしむる事にて、天下の人には愚不肖多く、賢智少なく候、事は又古今の替りなく候、然れば古聖人の道も教も後儒の申候様なる理の六借事は決して無之筈なる事明に候、(問答書)

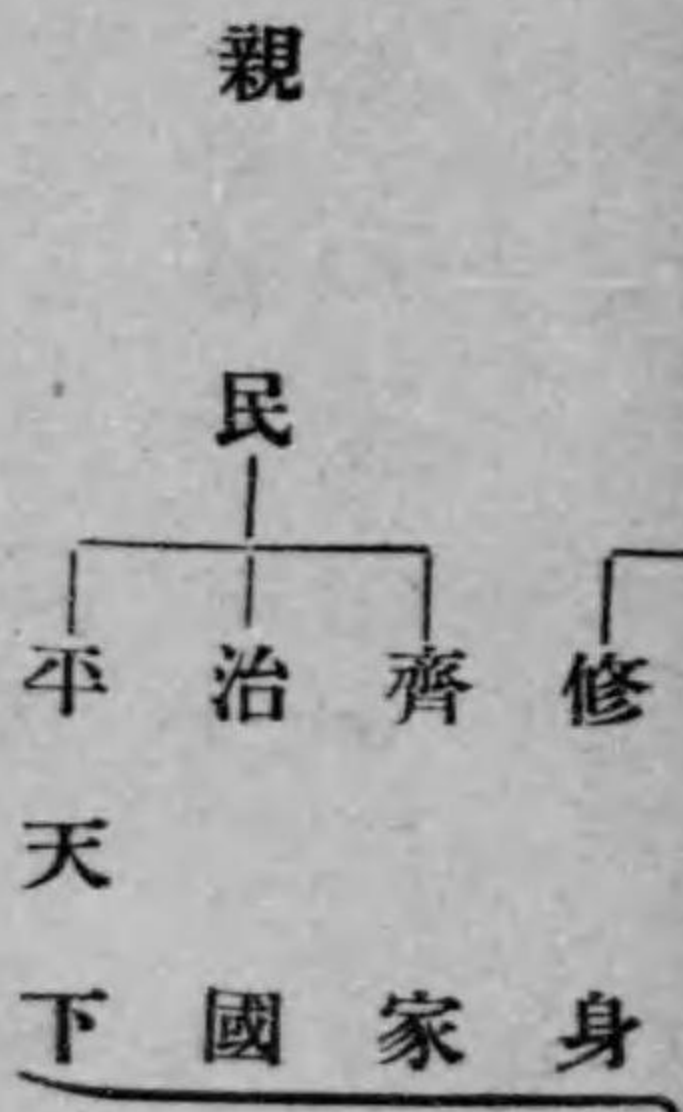
と。更に日本に例を取り通俗に之を説明して曰く、「先ヅトク／＼料簡シテ見ヨ、儒道ハ何事ゾ人ノ道也、日本ノ人ハ人ニ非ズヤ、君子小人トハ何事ゾ、君子ハ侍ナリ、小人ハイヤ／＼ナリ、誠ニ禮記曲禮ヲ見ヨ、實ニ武家ノ諸禮ト合スルモノナリ。」(訓譯示教)と。道德を平易に解釋し、其の普及に努めたるは道德教育上注意すべき點にして又特色ある所なり。

### 第二節 道德教育の目的

仁徳を有する政治家を養成し、政教の一致によりて社會國家の發達に貢獻せしめんとするは孔子教の眼目なり。即ち我が一身を修養したりとて決して満足すべきものにあらず、修身は方便なり條件なり、吾人の求むる所はこれ以上にあらざるべからず。若し

修身に止まらば隱者逸民も健全なる國民と云はざるべからず、互に集りて社會國家をなす以上には其の一分子たるべき個人は一人を修めたりとて足れるものにあらず、必ず自ら其の團體を率ゐて之を誘導陶冶する位置に達せざるべからず、かくてこそ初めて健全なる國民の責任を盡したるものなりと云ふべしとは徂徠が根本の主張なり。故に「大兵先王之道爲安民立之、故君子之道皆主施於人焉。」(辨道)と云ひ、尙ほ修身と治國家との關係を述べて、聖人の道には身を修め候事も有之候へ共、それは人の上に立候人は身の行儀惡敷候へば下なる人侮候て信服不申候事、人情の常にて御座候故、下たる人に信服さすべき爲に身を修め候事にて、兎角は天下國家を治め候道と申候が、聖人の道の主意にて、御座候たとひいか程心を治め身を修め無瑕の玉の如くに修行成就候共、下を

わが苦世話に存じ候心無御座國家を治むる道を知り不申候は、いかの益も無之事に候、問答書と云ひ、尙ほ注意を加へて、身を修むるを推し及ぼして其の餘を以て民を治むる事と云ふに非ず、大平策と云へり。即ち安民は目的にして修身は其の一方便たるに過ぎざるなり。以上は獨徠徂の主張たるのみならず、實に孔子教乃至儒教の本領にてあるなり。今大學に就きて之を窺ふに三綱領八條目あり、而して其の關係は次の如し。



明明徳は自利なり、人格の高進なり、仁徳の完備なり。親民は利他なり、社會の救済なり、仁徳の發現なり、仁政の施行なり、然れども明明徳と親民とは始終相待つべきものにして、天子より庶民に至るまで一に是皆修身を以て本となし、治國平天下を以て理想となすべく、かくて内外自他個人社會に對し、全く宜しからざることなきは、即ち止至善なり。而して是に達するは儒教最終の目的なり。故に徠徂の考ふる理想的人物は、道德的興味深く、其の信念堅く、常に社會民衆の道德的向上を圖り、國利民福を増進するを以て己が

任となせる君子人なり。語を換ゆれば、國士なり。國士の教育は現時の教育も亦之を努む。由來儒教は濟世救民を以て至徳となす。雖も徠祖が特に國家社會の方面を力説せるは佛耶の思想と異り、我が國體に合致せる教育方針なるのみならず、國家主義の鼓吹に努むべき今後の教育上に資する所あるべきなり。かゝる見を有せる徠祖は、道徳の普及に關し、各自至誠を披瀝して其の能力に應じ、互に相扶けて徳に至るは人生の美事にして、萬人のなし得る所なりと考へ、其の心掛を述べて曰く、夫六經殘缺矣、生於今世、孰見其全命也、家貧無書命也、雖然心誠求之、天其佑之、仕不優、無暇命也、故已不能學者、喜人之學、力能使一人學者、使一人學也、雖不學、猶學也、何必才智德行出諸已、而後愉快乎、(辨道)と。蓋しこは徠祖が自家の主義に、かなひたる理想的人物の心情を明かに表白したる

ものなりと雖も、其のしか云ふに至りしは、その志操の高尙にして、心情の溫雅なる所あるが爲にして、得がたき教育家の態度を備へたるものといふべし。

### 第三節 節慾主義及び功利

#### 主義的傾向

禁慾主義は古く佛教によりて提出せられ、次で宋儒によりて唱道せられ、(朱子は必ずしも禁慾主義ならず、然れども朱子學派は理と氣とを併稱して、理性の光を暗からしめ、此に人慾を生ず、故に人は修養に依りて、氣質の性を覆へ、物慾を去らざるべからずと説くを以て、其の學派中には嚴密にその精神を實行せん、遂に禁慾主義)従つて邦人にも影響を與へたる思潮なるも、孔子教にこの思想絶えてあるなし。元來慾なるものはしかく卑しむべきものにあらず、否賤しむべからざるのみか、益々之を盛なら

しむべき筈のものにして、只之を節制し人格的に統一調和を圖れば可なるべきなり。故を以て活躍發展の氣根に富める徂徠は孔子教本來の精神によりて節慾主義を主張し時人に覺醒を與へたり。所謂人欲者、即性之欲也、即好惡之心也、味其文意、唯言禮樂以節耳目口腹之欲、而平好惡而已、初非求人欲淨盡也、(辨道)と實に正當の見解にして、徂徠が性惡説を奉じ人慾を認めたるの効果歴然たりといふべし。而して自己の主張に忠實なるものは、反對説を微塵に粉碎せずんば止まざるの概を示すは古來の常例なり、況んや徂徠の如き熱誠の人に於てをや、之を以て徂徠は日夕道德を口にして止まざる世の所謂道學先生なるものを忌むこと甚しく世儒醉理、而道德仁義、天理人欲、衝口以發、不佞每聞之、便生嘔噦、乃彈琴吹笙、否則關々雉鳩、以洗其穢、(徂徠集)と然り念々これに注意すれば遂

に病的道德に陥るものにして、戒むべきは餘りに道德に過敏なるにあり。此の如くにして人生上慾望の必要を認めたる彼は利用厚生を重んじて治國安民の要訣となし、この見地よりして善を解釋して曰く、「曰、可欲之謂善、雖非先王之道、凡可利人、救民者、皆謂之善、是衆人之所欲也、先王之道、善之至也、天下莫尚焉、(辨名)と。尙ほ求利が人情の自然なること及び義利の合一を論じて、近世儒者誤讀孟子首章、故義利之辨太過焉、大氏義利豈判然二物哉、避害就利、凡人之心、皆爾、凡人之心、即聖人之心也、義之至利、必隨之、如孟子以利天下爲心、惠王適欲利其國、故孟子曰、何必曰利、但孟子語章意激甚、是其所以有弊也、子罕言利、蓋爲世鈔、大心者故也、(徂徠集)とし、人民をして正當の慾望を満足せしむるは最も養の道に副へるものなりとなし、功利主義

的傾向を發揮せり。蓋し孔子教は先天的良心論を保持するものなるを以て儒教にありても之を功利主義なりと断定するには尙研究の餘地を存すと雖も徂徠の見解は著しくこの方面に進出せるものなりと云はざるべからず。

第四節 人の長所を扶け善を勧めよ

徂徠は惡を以て善之未成也(徂徠集)即ち消極的善なりとの見解を有せるを以て惡に對する考は頗る寛大なるものにして只善を勸むれば惡なるものは自ら變じて善となるべしとせり。只罰を用ひ刑を用ふるは乃惡其害養者矣(徂徠集)にして決して非惡其惡而刑之矣(同上)となせり。即ち刑法上の罰に對しても頗る教育的にして古刑法の如く贖價的又は報復的ならざらしむるを見るべし。

而して人材を作らんとするも亦然り。只其の長を扶けて大ならしむれば可なり先王之教唯遵其善而惡自消也其語治也務言賞君子而罰惡人而不知先王之道唯在舉仁者而不仁者自違也務其長短得失而不知先王之道唯在用其長而天下無棄才也(徂徠集)而して人の善を見て惡を探らず長を扶けて短を顧みず専ら積極的方針を探れば善行多く良材満つべし。然るに今の世は惡を責め短を去らんとし専ら消極的の方面にのみ注意する故所謂繼子根性を生じ反つて人を害し過を多からしむるものなりとして曰く予觀人教學者多所指摘則心退縮畏憚無復勸意躬自修省亦爾務欲去不是處則覺杆格不易進焉一日忽見則有是處改意從之則鄉者所見不是處亦不覺其在何時去體矣以此觀之下等資質最當以好仁爲先也(護國隨筆續篇)と。吾人は今の教育者が動もすれば消極的方法



を取ること多きことを遺憾とするものにして指導の本領はこの積極的方面にあることを主張せんとするものなり。

第五節 禮樂と習慣

人として身體よりも才幹よりも將た知能よりも尊きは道徳なり。而してその道徳教育の目的は品性の陶冶にあり品性は習慣の合なる故に善良なる習慣は個人の品性を確立するにも社會の品位を高尙にするにも必要缺くべからざるものなり。古來教育家又は爲政治家が社會風教の維持に努め或は兒童及び青年に對する生活環境の教育的整頓を企圖するは習慣養成の外的影響を重んずればなり。殊に徂徠はこの點に注意すること篤く禮樂を以てこれが促進を圖らんとし先づ其の價値を讚美して曰く先王之道

禮樂焉耳と又曰く大哉習乎人之勝天者是也其在天下國家謂之風俗其在一身謂之氣象故善觀乎天下國家者必於風俗善觀乎人者必於氣象禮樂以爲教則風俗厚而氣象盛矣聖人之所以勝天者是已風俗者合億兆而一之者也人之全力也五尺之身何以能參天地乎是聖人亦然必也合億兆而後人之力全矣故聖人之治天下也必在風俗上而存焉仁之極。(護國隨筆續編)と。而して此の如く貴重すべき習慣は何によりて得らるゝかと云ふに勿論言論の克く支配し得る所にあらず是非共自然及び人爲の感化により道徳的情操の涵養を圖り日に月に養ふて漸次に確定せしむるより外に途なきなり。而してこの感化力中最大なるものは禮樂なり。禮樂は先王の教術にして先王の教は之を外にして他に求むること能はざるものなりとし言論刑罰が力少なくして禮樂の貴むべき所以を述べて

曰く蓋先王知言語之不足以教人也故作禮樂以教之知政刑之不足以安民也故作禮樂而化之禮樂之爲體也蟠於天地極乎細微物爲之則曲爲之制而道莫不在焉君子學之小人由之學之方習以熟之默而識之至於默而識則莫有所不知焉豈言語所能及哉由之則化則不識不知順帝之則豈有不善哉是豈政刑所能及哉夫人言則喻不言則不喻禮樂不言何以勝於言語之教人也化故也習以熟之雖未喻乎其心志身體既潛與之化終不喻乎且言而喻人以爲其義止是矣不復思其余也是其害在使不思已(辨名)と。先づ知識を與へず事物の形容に觸れて自然に體得せしめんとその自然感化主義は其の啓發主義と相呼應して徂徠の教育的意見を明瞭にするものなるが徂徠が教ふるに先立ち學徒をして強き學修的攻究的精神を奮起せしめ何物にも自己の心力を傾注せしめ自ら工夫修養の餘地あらしめ

單に傳授を受くるに止まらず眞の類化をなし更に自力を加へて自己人格の發展を圖らんと努めしむる所は現時の活動主義及び自治自學の原則と符合せるを窺知し得べし。而して道德教育の目的たる品性の陶冶は道德的習慣の涵養に俟ち習慣の涵養は意志活動に一定の典型を與ふるにあり意志の活動は知識の指導に依るものなりと雖も其動力は筋肉活動の習慣及び感情の發動に俟たざるべからずしかも筋肉及び感情の活動は其の強き根柢をなすものなり。即ち幼者には知らしむべからず依らしむべきものにして専ら外形的肉體的の修練によりて習慣養成の筋肉的基礎を作るべく更に感情の感化を圖りて習慣養生の感情的基礎を作り知意活動の方面を決定せしめ漸く長ずるに従ひて次第に知的修養に努めしめ更に反覆練習に依つて意志

の自由を得しめざるべからず、しかも習慣養成の基礎的訓練は、行為の外部的規正及び感情的陶冶にあるを以て、禮樂を尊重せる徠徂は更に精しく外部的規正の必要を述べて曰く「然心無形也不可、得而制之、故先王之道、以禮制心、外乎禮而語治心之道、皆私智妄作、何也、治之者心也、所治者心也、以我心治我心、譬如狂者自治其狂焉、安能治之」辨道と。蓋し冷靜なる智識は行為の源泉たるべき感情を動かすに足らず、従つて學者に不道德家あり、僧侶に不信仰家あり、醫者に不養生家ある所以して、智識が感情と結合せんには實行に訴へて行為として發表し、幾多の筋肉活動を経ざるべからず、而して躡方と云ひ、訓練といふも皆これが爲にして、一定の規律に基き具體的に外部より心身を整理せんとする禮が必要なる所以も亦茲にあり。現時の軍隊教育はこの點に注意して兵士の精神界を

陶冶せんと企てつゝあり。されども禮は被教育者に採りては受動的になさしめらるゝものなれば之を轉じて能動的の活動となす必要あり、樂は即ちこれが爲めにして實に感情教育の最上のもものなりと考へたり。故に曰く「蓋樂者理性情之道也、先王之教能養人性以成其德者莫尙焉、且其爲教無義理之可言、無思慮之可用、不識不知、順帝之則、故性情之說、古唯詩與樂有之、喜怒哀樂亦人之所必有者也、然其動之偏勝而不中節、則必至傷中和之氣、以失其恒性情之所、以難成也、故立樂以教之」(辨名)と、希臘及び周代の昔より今日に至るまで音樂が教育上重要視せられたるはこれが爲にして、感情教育は昔の教育に於て重んぜられ、今の教育に於て疎せらるゝを知るべし。而して尙ほ徠徂は道德的知見の如きはこの禮樂によれる薰陶裡にあれば發明の結果教へず勉めずして自然に得らるゝ

ものなりとし熱心にこの方法を鼓吹せり。  
更に考ふるに、禮樂と教育殊に樂と教育との關係は美と徳の關係なり。最近歐米の教育界は益々美と徳との關係を認め、美的教育と道徳的教育とを交渉せしめ、教育目的に向つて美及び美術の價値を高唱せんとする傾向顯著となれり。所謂美的教育説は之にして、往昔希臘及び支那の教育に於て唱道せられ、又徂徠等が主張せる所に復古せんとする傾向あるは注目し、價すべし、而してこの美と徳との合體を説きて最も要を得たるは美學者にして、美術家たるジョン・ラスキンなり。彼の美學は道徳と宗教とを含み、この三要素は各孤立して存在するものにあらず、互に相俟つて成立するものなりとせり。而して目的論としては露國のトルストイの如く道徳と宗教とを美の上に置き、以て美術の準繩となさんとする

議論あり、又た獨逸のオット・エルンストの如く美を以て教育の唯一目的となさんとする等の極端説ありと雖も、徂徠の主旨は教育目的の中に美育の獨立的價値を認め、これに一定の場所を與へんとする考にあらず、美術中に含まる、倫理的要素に依り、徳性の涵養に資せんとするなり。即ち吾人が美術に對して與へらる、所のものは純潔の感情なり、美は醜を含まざるを以て純粹無垢なり、而してこの感情は徳に對する時も亦起るものにして善は毫頭の惡を交ゆるものにあらず、従つて純潔なり。この感情の内在的共通關係は徳性涵養上重要な要素となるなり。ライプチツヒ大學のヨハネス・フォルケルトは美術は人間の價値多き部分を表出すること、依つて自ら道徳的結果を生ずるものとして、美術的目的と道徳的發達との間に自然的一致を生ずるを以て道徳と美術と

は二元的にあらずして内在的なりといへり。實に美と徳とはこの關係に依つて互に聯絡あり、然かのみならず、音樂は感情の言語にして人に清明中正の感情を與へ、又其の歌詞歌曲によりて勇壯親愛・快活・同情等各種の徳性を養ふことを得べし。これ道徳を重んずる神社寺院が清淨潔齋に努め、禮儀作法を慎み、音樂色彩形體等の美を盡す所以なり。

第六節 遊戯と訓練

遊戯は兒童の生命にして渾身の勢力を此處に傾注し、自發的に且

つ自由に發作し得る所のものなり、されば身體教育上に於て必要なるは勿論、品性陶冶上にも重要なるは明らかなり、故に遊戯は小兒的にして快活無邪氣なる内に若干の道徳的要素を包容すれば可なり。さるに當時の道學先生等は兒童を成人視し、兒童心身發達の程度及び其の要求を無視し、遊戯の際にも一々仁義道徳を自覺せしめ、又之を以て總ての行動を律せんとせしを以て、徂徠は「人活物也、才智德行得養則長、豈唯形體乎、故聖人之幼也、亦唯日嬉戲常陳俎豆設禮容、豈有許多才智德行哉、(徂徠集)と云へり。是れ尙ほ道徳的に視たる嫌なきにあらざるも、其の要旨は善良なる家庭善良なる教師の許にありて嬉々として活躍し、自由に楽しく生活せる兒童は不識不知善良なる知識善良なる品性を作ることを得るものなれば、別に一々道徳を指摘し、之を自覺せしむる必要なのみ

か、しかする時は遂に束縛に過ぎ、萎縮せしむる恐れありとの説に歸着せざるを得ざるものにして、小供は小供らしくあれとの主張に徴するも明らかなり。  
而して尙ほ曰く、茶湯立花象棋戯蹴鞠の類は無益なる事に候へ共是をするはやむに勝れりと申事の有之候總じて人はたいあらぬ物にて候心のよせ所なければ悪事をする物にて候。(問答書)と。  
これ消極的に遊戯の訓練上の價値を認めたるものなりと雖も、悪事にあらざるものは出来得る限り兒童の自由に一任すべしとの意見は、教育者にも亦爲政者にも必要の箴言にして、吾人が日常の主張と合致するものあるを覺ゆるなり。

第七節 己の欲する所を人に施せ

己の欲せざる所之を人に施すこと勿れとは孔子の言なれば儒教は消極主義の道徳を主張するものなりとの非難をなすものあり、然るに徠徠は明らかに積極主義の主張者にして、祇恕於文、如心爲恕、故己之所欲以施於人亦恕也、(辨名)と云ひ、孔子の言を辯護して曰く、然共事廣大、非學者所能、且人心不同、所欲或殊、故止己所不欲言之耳、(辨名)と。蓋し孔子にもしかる考ありしなるべきも、徠徠によりて初めて知ることを得たるものなりと云はざるべからず。

第八節 孝悌より出發すべし

「五倫と申候も、中庸と申候も、孝悌忠信と申候もひとつ事に御座候、其内にも孝悌を専らと相見え候は、幼少なる人の未だ親の家内に居候内は、君臣朋友の上はさしあたらぬ事故に候。孝悌の内孝

を第一といたし候は、兄弟なき人は候へども、父母なき人は無之故に候。孝悌の教にも殊に專一に被成候事に候。扱之れを中庸の徳行と名付候事は、いかなる異なる人も、又才智すぐれ候人も、たれにてもなり申候事にて、別に高妙なる儀にて、無御座候故名付候に候。君子の道も之を土臺と致候事は、君子の道は仁にて候。仁は國天下の民を安じ候事にて、もとの上たるもの、道にて候。孝悌忠信中庸の徳行は、分に相應に誰にてもなり申候事にて、上たる人ばかりの道にては、御座なく候。孝は父母を養ひ安んずる道にて候。弟は兄弟を養ひ安んずる道にて候。忠は君に仕へて君を安んずる道にて候。信は朋友を安んじ養ふ道にて候。されば何れも皆仁の小わりと可被思召候。たゞ人々の量の大小御座候故、大量の人ならでは仁をわが任にいたし候事なりが、たく候量の大小にかゝはらず、たれにて

も仁の心をやしなひ候事は、孝悌中庸の徳行と可被思召候。問答書と。蓋し孝は親愛を意味して仁となり、悌は敬従を意味して義となる。故に之を擴充すれば仁義全し。これ孔子教の精神にして一般儒者の皆いふ所なれども、其の人の能力及び境遇に適せる材料を選まんとする徠徂の考案には、一段の妙味あるを感ずるなり。

### 第三章 知識教育

#### 第一節 形式的陶冶の尊重

知識教育とは所謂智育にして方法論よりいへば教授作用これに當り、豫定の方法を以て被教育者の知識技能を増進し、これが完全の發育を得しむるものなり。而してこの方法には形式的陶冶と(心力)練磨實質的陶冶(智能)の増進との二方面あり。後者は智識技

能の眞象を得るを目的とし、前者は心理上の原則に基き能力の發達を圖るものなり。心理學の發達は晩近のことなれば前者を併有することによりて智育なる語の生じ來りたるも後世のことなり。されば昔心理學上の知識少なかりし時代に於ては心力啓發の方面に注意したるもの少なかりしは、敢て怪しむに足らざる所にして、又注入教授の一方に流れしも止むを得ざる所なり。徠徠はかゝる時代に生れたるものなれば今の如き精細なる心理方面に適合したる定策ありしにあらざるも、時代に先んじて明らかにこの二方面あることを自覺し、自學啓發の主義を高唱すること共に教育は兒童の心意發達の程度に應じ、物を教ふると同時に其心力をも練磨すべきものなりと考へたるは、注目に價すべし。即ち政談に惣じて人の才智は様々の難義困窮をするより出るもの

なり。總じて人の身は使ふ程逞しくなるものにて、手を使ふ時は腕強くなり、足を使へば足強くなり、弓鐵砲ねらひを仕ふ夫は目強くなり、心を使へば心に才智生ず、難義困窮に様々會ふときは様々にもまれて才智逞しくなる。最も自然の理也。とあるは是れ明らかに心に心力練磨即ち形式的陶治目的を説けるものなり。故に當時の教育法の非を示して曰く、今時の人年たくる迄大人らしき心のなきは早くおとなしきまねをする故なり。(太平策)と。これ當時兒童の知識發達の程度を考へず、心力の練磨を忘れ、妄に知識の注入のみを圖れる輩に與へたる一大鐵槌にして、徠徠が智育の眞義を解し得たる程度も亦明瞭なるべし。



第二節 學科の選定と人文

主義的立場

徂徠の思想が著しく人文主義的傾向を有すると共に、又多少實利主義との調和的方面をも併有せることは前節所陳の如し。即ち徂徠は古文學の醇雅なるを稱賛せしも、文學者を作らんとにはあらず、禮樂を以て教の最美なるものと歌ひしも、道學先生を作らんとにはあらず、要は其の美しき品性を備へ藝術に熟せる國家有用の材を作るにありしなり。即ち能力の中等なるものは從順なる國民善良なる社會の一員となり、優秀なるものは育英爲政の衝に當り、治國安民を以て自ら任じ、社會國家の安寧と發達とを圖るべき活動的の士君子即ち紳士とならしめんとせしなり。されば學

科の選定も亦この主義により、經學を以て必須科とし、更に隨意科として律學、兵學、數學、書學等を置けり。勿論當時は經學を初めとし、史學、文學、法律、經濟に至るまで皆書物によりて講究したるものなれば、學問即ち讀書にして、禮樂射御書數の如きは周禮以來六藝として藝術の方に算へられたり。徂徠もこれに倣ひて讀み書きを主とし、文武の藝術を加味して、全學科を組織せしなり。然れども學科の組織に於ては徂徠の考は十分明瞭なりといふべからず。この方面に於て我國教育史上に光彩を放てるは徂徠と略ぼ時代を同じくせる貝原益軒にして、兩者を比較せば徂徠は到底學科の整理開拓に功績あるものといふこと能はず。只茲には徂徠が知識教育に對して如何なる見解を有したるかを説明すれば足れり。

第三節 多方面の知識尊重

淺薄偏狹なる知識は事物を判断するに當り、全局より見て正當に其位置を定むること能ざるものなれば、専門家にあらざる以上は、多方面に興味を持ち、多種の知識を貯ふること必要なり。例令専門家と雖も、普通學の素養なければ自家見地の基礎を確實に建設すること能はざるものなり。況んや當時の學問は道德を主としたるものなれば、健全なる常識の發達を要することは當然なり。故に曰く「總じて學問は飛耳長目の道と苟にも申候、此國に居て見ぬ異國の事をも承候は耳に翼出來て飛行候ごとく、今の世に生れて數千歳の昔の事を今日に見るが如く存候事は長き目なりと申事にて候されば、見聞廣く事實に行きわたり候を學問と申事に

候。」(問答書)「雜書を見ずしては叶はぬことなり、草なることを知らねば、眞なることもたしかなきことなり。」(訓譯示教) 尙ほ極言して曰く「言學問之道、貴博不厭雜、苟立其大者、撫而有之、則雖諸子百家皆在於吾道之中也。」(辨名)と。其の大なるものは吾が思想の系統にして、我は各種の方面より其材料を收集し來りて之を同化し、以て吾が思想を豊富にし、偏狹誤謬に陥らざらしむべしと云ふにあり。即ち當時の學界の如く、妄りに流派を立て、互に黨同伐異を事とせる時勢にありて、この見界を持し、他を容れて厭はず、衆を雜へて忌まず、學習の眞髓を把へ、眞理追究の正鵠を得んとしたるは尊敬に價すといふべし。

### 第四章 身體教育

儒教主義の教育の源泉たる周禮にも體育を必要とし、射御の二藝を加へたるが徠徠もこの必要を認め、武人のみならず學生にも武藝を課し、學術的研究によりてこれが發達を促がさしめんとて、學校内に武藝稽古所を立つべきことを主張したり。政談に軍法並に弓馬鎗術の武藝も六藝より出でたることにて、古今の差別、和漢の相違を知らざれば其道明らかならず、古今和漢を知ることば學問によらざれば知られぬことなり。されば備前長門などの仕形の如く、學校内に武藝の稽古所を立て稽古さすべき事也。當時學者は武藝に疎く、武藝者は學問に心付かざること宜しからざることなり。と。されども其精しき方法は知るによしなし。

### 第五章 教授法

#### 第一節 徹底せる自學啓發主義

徠徠の生存せる元祿享保の世は講義式教授全盛の時代なり、即ち注入教授の最も盛に行はれたる時代なり、故に徠徠は猛然としてこの傾向に反對し、敢然として自學啓發主義の教授法を力説し、大に斯道革新の實を擧げんとしたるは前節既に述べたるが如し。然れども其の所説の明快にして徹底的なる到底割愛し去るに忍びざるものあり。更に項を設けて啓發主義の真相を詳述する所あるべし。

「憤悱啓發、一隅三隅之章、孔門計にかぎらず、今日に至候ても、教法は唯如此矣。」問答書「大抵人心喜開通、惡閉塞、雖蒙生、日誦無分曉語、必

生厭想惰氣乘之僅得可解者、輒生踴躍、(譯文筆跡題言)と云ひたる徂徠の言は克く從來の注入主義を轉覆して我國の教授法を一變し、早くも徳川時代に於て自學啓發的教授法の曙光を上げたものにして、徂徠が教育史上の功績は甚大なりと云ふべく、徂徠以前我國人として此の如く明瞭に該主義を唱道したるもの一人もあるなし。

其説に曰く、教之條件其數甚多、曰萬物皆有於我之事也、故曰皆備於我、習之熟而後爲我、有爲我、有則不思而得、不强而中。(學則第三) 教育的可能性は心身發達の内部的條件として生來我身にあり、故に教師は其外部的條件となりて之を刺戟し、之を誘導し、生來の萌芽をして自然の理法に従へる完全の發達を遂げしむべく、學徒は次第に習ひ熟し、順次に經驗を積み自ら工夫して發明し、一步々々に

進まざるべからず。即ち「學者効也、覺也、有所効法而覺悟也。」(辨名)にして、孟子に所謂かの苗を長せんとする者や、襲ふて之を取らんとするが如きは必ず成すこと能はざるものなり。「習之久而後知至焉、身不習其事而欲知其理、不習其事而欲得其意、難矣哉。」(與竹春菴書)とされば、教師は學徒が自ら工夫に工夫を重ね、とも尙ほ考へ得られざる時に暗示を與ふれば可なり、總じて聖人の教ハワザヲ以テ教ヘテ道理ヲ説カズ、偶々道理ヲ説ケドモ、カタハシヲ云テ其人ノ自得スルヲ持ツコトナリ、其故ハ人ニ教ヘラレタル理窟ハ皆ツケヤキバ也、用ニ立ヌモノ也、一切ノコト我身ニナサズシテ、其理ヲ知ルコトハ、決シテナキコトナリ。善ク教ヘル人ハ一定ノ法ニ拘ラズ、其人ノ會得スベキス、シテ考ヘテ一所ヲ開ケバ、アトハ自ラ力ノ通ルモノナリ、然ル時ハ皆自心發得シテ知ル故、知リタルコト皆

我物ニテ用ニ立ツナリ、聽ク人ノヨク聽キワケルヤウニト思ヒテ  
 云事ハ公事ノ奉行ニ向ヒテ己ガ無理ナラヌコトヲ訴フルガ如シ。  
 彼ヨリ求ムル心ナキニ此方ヨリ説カントスルハ説クニア  
 ラズ賣也賣ラントスル念アリテハ皆己ガ爲ヲ思フニテ彼ヲ益ス  
 ルコトハナラヌコト也。(太平策)とて教師の干涉に過ぐるを難じ  
 學徒の自動自習を重んじ思之、思之又重思之……「の句を案出し  
 言議に於ても實際に於ても共に之を重んじたるは教授上の一大  
 原則にして之を十七世紀頃に起りたる歐洲教育改良家の意見と  
 比較するに毫も遜色なきのみか更に痛切を覺ゆるものあるなり。

第一節 直觀主義に着眼す

直觀主義は西歐に於ける教育改良家之を創唱し、ベスタロツチに

至つて完成し、爾來童蒙教育にありては著しく之を尊重するに至  
 れり。即ち直觀は知識の根柢にして、思想の源泉なり、故に人は直  
 觀に訴ふるにあらざれば事物の真相を確知するに能はざるのみ  
 ならず、感覺を鋭敏にし、觀察力を養ふ利益あり。是に對する徠徠  
 の所説には纏りたるものなしと雖も、推測すること難からざるな  
 り。即ち先づ説明教授の徒勞にして弊害多きを擧げて曰く、乃舍  
 物而言其名言之雖巧乎熟若目睹、且也、徒名無物、空言狀之、故其言愈  
 繁愈升、言之者以臆、聽之者以臆、曼衍自恣、莫有底止……故聖人之  
 教貴乎格、求行之者也、故唯其物聃也者、務言之者也、夫言之者、明一端  
 者也、舉一而廢百、所以害也。(學則第三)とし、尙ほ藝術を教ふる時、亦  
 然りと附言したり。而して東都の人士が讀書を理解すること能  
 はざる所以を述べて、實際の知識なき故なりとなし、今都人士抱繁

此土而沉淫此俗、以此讀書求識古今之事、其耳目所未嘗、其何能識之哉、習培塿以爲山、問山不知、習汚洼以爲水、問水不知、諺曰、夏蟲疑水、以胸臆所無也。(徂徠集)と。此に於てか、自己が經歷の幸なるを云ひて曰く、余幼從先大夫、遜於南總之野、距都二百里、而近、然諸侯不國、君子是以弗居、乃田農樵牧、海蛋民之處、性好讀書、書無可惜、無朋友親戚之驩者、十有二年矣、當其時、必心甚悲、以爲不幸也、然不染都人士之俗、而嫻外州民間之事、以此讀書、所讀皆解……由是遂虛譽于海內者、南總之力也。(徂徠集)となし。この確信を以て、武士の土着論を唱へ、深宮婦女子の手を離れて、田舎に行き、自然界に接して、實際の知識を作るべしと、勸告せり。

### 第三節 讀書教授法

#### 第一 直讀法

今日歐米の外國語を讀むものは、皆其國の發音に従ひ、頭より直讀して、意味を取るを普通とする故、反り點送り假名等を用ふるものあらば、人之を笑ふべし。然るに獨り支那の國語たる漢學が其軌を異にし、世人の忌める、又笑へる、順逆廻環の形式を取り居るは、頗る怪しむべきものなれども、誰人も敢て之を怪しまざるは、怪しき限りなり。此に於て、或は漢文直讀法を唱ふるものありと雖も、因習の久しき敢て改むるものなく、反つて直讀法を聞きて、常軌を逸せるものと見做に至るは、止むを得ざることなり。然るに、二百年の昔に於て、この無意義なる還讀法を退け、斷然直讀法を取るべしと唱へたるは、徂徠の卓見と云ふべく、しかも其方法は、全く今の外國語教授法と一致せるものにして、支那音により、頭より直讀して

意味を取るべしと云ふにあり。これ「唐土ニテハ詞短カキ故同ジ  
「チン」ト云フ音ノ内ニモ、輕重清濁平上去入トテ様々呼ヤウニテソ  
レト、意カワル」(訓譯示教)故にして、語勢文脈等は直讀によりての  
み眞意を捉ふることを得べければなり。

第二 訓譯法

今の譯と同様にして、文章を適確に解することなれば讀書の最も  
重すべきものにして、譯之一字、爲讀書眞訣、(譯文筌蹄題言)と喝破せ  
るは至當の見解にして、徂徠の見を推度するに從來我國に慣用せ  
られたる廻環の讀法、漢文の讀方たる和訓は洋書に於ける今の直  
譯と等し、今の直譯は誰人も其不可なる所以を知れり、これ文體を  
異にせる二國語を併用して文意を取らんとすればなり、故に譯文  
筌蹄題言に曰く、但此方自有此方言語、中華自有中華言語體質本殊、

由何胎合、是以和訓廻環之讀、雖若可通、實爲牽強、而世人、不省、とされ  
ばこれより得たる知識は、勿論不確實にして、意味を探る上に於て  
隔靴搔痒の誹を免れざるなり。然るにこの不完全なる和訓を以  
て満足せるは、彼我國語の差別あることを知らざるより起りし誤  
謬ならば、漢籍を繙かんものは、常にこの兩者の別あることを念頭  
に置くことは、最も緊要なることなりと大呼せり。即ち文戒に曰  
く、所讀皆中華書、故識中華、此方異同處、是此方學者第一要務也、と。  
かくて自家の主張を提出して曰く、彼の直譯も譯の一部なり、此方  
學者、以方言讀書、號曰和訓、取諸訓、詰之義、其實譯也、而人不知其爲譯  
矣。(譯文筌蹄題言)と。唯世人が考へ及ばざりしは、其譯たるを知ら  
ざるにあり、されば尙ほ一步進んで、其本來面目を識得する様に心  
掛くれば可なり。即ちかの和訓を施せる書籍を用ふるは、恰も今

の外國語を學ぶものが直譯書を用ふると同様の弊害あり。直譯書を用ふれば一時は読み易く入り易しと雖も、一旦白文の書物を取るときは全く解すること能はざるに至るは今人の知る所なり。徂徠も曰く「讀書作文、一唯和訓是靠即其識稱淹通學極宏博、倘訪其所以解古人之語者、皆似隔靴搔痒、其授毫攄思者亦悉侏離鳥言、不可識其爲何語、此無它也、嚮所謂易於爲力者、實爲之崇也、」(譯文笠翁題言)と。即ち直譯書に依頼する時は其の發達の初めは速なる様なるも、實は捷徑の法にあらずして、初めより白文に慣るゝこそ捷徑の方法なれ。これ恰も盲者が反つてよく途を知れると同様の理なりと形容して曰く「予觀瞽有相者、多不識路、其無相者乃能自行、是豈其才爲殊、讀書力亦爾、瞽要早去、相讀書欲速、離和訓、此則真正讀書法、其初若不易得力、極若于廻、其實捷法直徑、莫有過此者、」(同上)と。

然らば如何なる譯法を用ふれば可なるか。徂徠は答へて曰く「現今の譯法の如く、其當時の俗語を以て義譯すれば可なるのみ。何となれば言語には生命あり、世載言以遷、言載道以遷、(徂徠集)年代の異なるに従ひ既に死せるものあり、新に生じたるものあり、同形にても内容を異にせるあり、且つ雅言あり、俗言あり、使用の程度範圍も異れり、之を以て當時の人の思想を表明するには其當時に活用せらるゝ普通語を以て最も適切なりとすべきなり。さるに和訓なるものは古の雅言にして、重譯を欲すべき必要もありて不便多し、曰和訓曰譯、無甚差別、但和訓出於古昔搢紳之口、侍讀諷誦、金馬玉堂之署、故務揀雅言、簡去鄙俚、風流都美、誠宜人耳、且時屬淳龐、語言之道未闡、以此而求於中華之言、寥寥覺乏矣、況以世降時移、言之道益變、益繁、益俚、益俗、故以今言求和訓、已覺古撲不近於人情、如和歌者流、勢



語源語讀書、此皆閨閣脂粉猥褻之語、一似金瓶梅類、今讀之、高雅幽妙、大費註解、……且俚俗者、平易而近於人情、以此而譯中華文字、能使、人不生奇特、不生卑劣心、而謂聖經賢傳皆吾分內事、左騷莊遷、都不、倍屈、遂與歷代古人交臂、晤言、當論千載者、亦由是可至也、是譯之一字、利益不尠、熟謂吾好奇也哉、徂徂集と。且つ兩國語は互に文法を異にするを以て、自然其間に種々の差異あり、則知此方用助聲多於彼方也、其也矣焉類、無方言之可訓、而此方助聲、亦莫有文字焉、則知彼此語脈文勢轉折之則自殊也、異字同訓者衆、而和語亦有不入訓者存焉、則知彼之所有、此不必有、此亦不無彼之無也、有一訓被多字者焉、有一字兼多訓者焉、則知華和言語參々互涉、不可以一抵一也、(同上) 故に吾人は只俚語によりて義譯するを以て最上となすものなりと。尙且つかゝる譯法は使ひ慣れざる故頗る困難なりと感ずるもの

あらんも實際は然らず、元來支那は荷蘭等の諸國とは性稟を異にし、「人情世態も吾に同じく符契を合する如くなるを以て、意味の解し易きものあり。且つ今と昔と時代こそ異なれ、世態人情にはさしたる差異なきのみか、聖人の言が如何に高遠なりと雖も、苟も言語たる以上には深奥難解の區別あるなし。其深淺の差あるは、只之を見る人の思想の高下により、其判断の仕方に差あるのみなり。さるに吾人が一見奇異に感ずるは、其音の同じからざるが爲めのみ。故に能く其語を譯する時は、此方の平常の言語を以て聖人の語をも譯することを得るものなりと附言せり。

第三 排講義主義

自學啓發の精神に乏しく、注入主義一方なりし當時に最も流行したるは講義式にして、將軍綱吉が講義を以て殆んど道樂の如くに

好みしより、儒者皆これに倣ひ、且つ諸家競争の結果之を巧妙にする必要を感じたりしかば、講義術は頗る發達したり。而してこの方面の大家を室鳩巢、佐藤直方なりとなす。山崎闇齋及び其門下生も亦講義獨尊主義を採り、身振音色等に至るまで思考を凝せり。されば當時の教師は教師といはんよりは寧ろ講談師の感ありき。蓋し當時の教師は教ふることの方法研究のみに腐心し、學ばしめ、悟らしむる方法は全く之を忘却し盡したるなり。徠徠は元より自學啓發主義を取りしものなれば痛くこれに反對し、譯文笠蹄題言十則を書きて其弊十條を挙げたり、今逐一之を掲げん。

一、今の講義は唯字義解釋及び講義の體裁等の備らんことのみ  
に注意せり。即ち字話句意章旨篇法正義旁義註家同異以及故事佳話文字之來歷凡有關係于本文者叢然並集臚列如開肆連續

如貫珠一物不備則嫌於已之耻一語間歇則慮於聽者之倦務美聲氣以悅人耳甚者時間笑語警醒坐睡動有靳祕責加束脩師傷其仁弟子傷智流風一成滔々弗反(譯文笠蹄題言)故を以て假りに其説く所は精神鮮明にして一つの錯誤なしとするも、學徒の心力を考へ記憶理解思考心情發等に注意せざるを以て、初學者の如きは其の繁雜なるに苦しみ、一々記憶すること能はざるのみならず、思想の混亂を來す恐あり。

二、學徒の智識發達に次第あるを以て、高妙の論精微の説あるも、初學者は充分之を消化すること能はず、従つて臆私擬度遂に陋見に就く恐あり。

三、久しく講義を聴き頗る智識程度發達せるものにて、一度戸を閉ぢて讀書を試むるに、累日苦しむと雖も、僅かに一日講義を

きいたる程の利益なきを知るや、忽ち卑劣心を起し、貴耳賤目讀書を廢して、只すら聽かんことを欲し、果は終生講席にあらんことを希ふに至るかゝる依頼心を起すを以て、未だ講帷の下より名士の出でたる例なし。

四、書は萬卷限りなし、一々聽きて知り盡し得るものにあらず。

五、廢讀務聽の結果、副墨なきものは讀むこと能はざるに至る。

六、師の尙ぶ所は弟子是れに倣ひ、從旁援筆錄其所講言、前後次第一字不差、甚者則曰、師於是處一警咳、至此句一擊節、學其聲音、擬其容貌、自ら得意がるに至ると、講義の弊を評し得て盡せり。實に當時は紙の時代にして、ゲータが白きもの、上に黒きものを置きたるものを以て、智識の淵源と心得安んじて、家に齋らし歸ると痛罵せしも、これが爲めにして、又能く現今我國に於ける專

門學校に於ける筆記教授を論じ得たるものと云ふべし。

七、和訓あるものにつきて講義する故、生徒は其説の通すべきを見て、至當の見なりと考へ、しかも既に遠く本然の義理を離れ居ることを知らざるに至る。

八、教師たるもの多く、文章を作らず、故に能く文字を知らず、從つて講習する所、妄誕なり。且つ文字は道を貫く器なるを以て、其の道の眞意を取ること能はず。

九、以上の如くなるを以て、不朽の大業遂に廢するに至る。

十、かゝる教授者の間にも、間々豪傑出づることあるも、一度講肆を開く時は、忽ち弊風に染み、黨派的競争を初め、力めて售らんことを求め、或は孔孟の宗旨は此にありと呼び、或は閩洛の正脈は焉に存すと叫ぶを以て、多少の英才もこの殻中に引き入れられ

狹隘固陋の見到に陥るに至る悲しむべきことなり。學問の道は然らず自由討究を旨とし博く學びて知能を啓發し個性の特徴を發揮して棟梁の材を成すにあり。

以上の弊は獨り知識のみならず道德上にも影響するものあり即ち教師は好んで高妙の說を出して耳目を聳動せんと力むるを以て學徒も亦高慢心を生じ教師より講義の第一句を聽きて未だ第二句を聽かざるに稍々己の心に合はざるものあれば颯然として立ち去り以て彼此と品評するが如き浮薄の風を生ずるに至る。以上の指摘は唯に當時の弊風に當るのみならず現時の學校に對しても一大痛撃たりと云ふべし。

第四 自學的讀書案

講義式の缺點は直に頭より皆解し盡して思慮熟考の餘地を存せ

ざるにあり。故に徂徠は思之、思之、又重思之、思之、而不通、鬼神將通之、(徂徠集)を以て貴となしこの主義に基きて次の自學的讀書方法を案出せり。

其一 教授の方法

(一) 第一法、理想的の讀書法は今の外國教授法の如く、教以俗語誦以華音譯以此方俚語、(譯文笠諦題言)にして、絶對に和訓廻環の讀方を用ひず、始めの間は零細なる二字三字位の句を以て讀み次第に増大して文章を讀み得る様にせしむるなり、かくてこの讀方に熟達する時は全く支那人の如くなるを以て、次第に困難なる讀本に移るも破竹の勢を以て讀破することを得べし。

(二) 第二法、地方にては崎陽の學(崎陽は長崎のこさなり、長崎は當時此より輸入せられしなり、故に長崎の)未だ弘まらず従つて教師もなき學は直ちに支那語學の意味となる。